

# 柳沢城跡

国道406号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



長野原町埋蔵文化財調査報告 第4集

# 柳沢城跡

国道406号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



## 序 文

長野原町では、近年埋蔵文化財の発掘調査が増えており、それぞれが、みな貴重な文化遺産でもあります。中でも勘場木石器時代住居跡は、群馬県指定史跡として出土品、住居跡もよく保存されており、最近では上屋も改修されました。

本町では、群馬県教育委員会文化財保護課の指導のもと、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を3ヵ年間かけ実施しました。その結果、長野原町には、数多くの遺跡があることが確認されています。

今回、柳沢城跡の発掘調査は、この調査結果を踏まえた上で国道406号線道路改良工事に関する発掘調査であります。平成4年度から平成5年度にかけて発掘調査を実施しました。中世の山城の様子や、めずらしい陶器や鉄製品、銅製品など、予想を上まわる貴重な成果を得ることができました。長野原町の中世史に新たな1頁を加えられたことは、大変喜ぶべきことです。

この調査を実施するにあたり、町当局をはじめ、御指導の先生方、作業に取り組まれた皆さんならびに、関係各位に対し厚く御礼申し上げるとともに本書が広く活用されて、いっそう文化財保護に役立つことを願い序文といたします。

平成7年3月

長野原町教育委員会

教育長 市 村 仁

## 例　　言

1. 本書は、国道406号線道路改良工事に先立つ発掘調査で、柳沢城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、整理業務は、群馬県土木部道路建設課から依頼を受け、群馬県吾妻郡長野原町教育委員会が実施した。
3. 所在地及び発掘調査期間は、次のとおりである。

平成4年度　長野原町大字横壁字地蔵谷1101-3　ほか  
1区　発掘調査　平成4年8月1日から平成5年3月25日まで調査を実施する。

平成5年度　長野原町大字横壁字地蔵谷1089ほか  
2区　発掘調査　平成5年5月26日から平成6年3月25日まで調査を実施する。
4. 発掘担当者は、長野原町教育委員会社会教育課主事、白石光男が担当した。
5. 遺構の写真撮影は、白石光男が行い、遺跡の航空写真は青高館に委託して撮影した。
6. 整理業務は、担当者を中心に行い、遺物の整理を小出庫雄、萩原仁、内海吉朗、野口修男が行う。写真撮影を嶋村和作が行い、遺構遺物のトレースを竹渕みずゑ、市村智恵、桜井佳世子が行い、編集は白石光男が行つた。
7. 本書の執筆は、I・II・III・Vは白石光男が担当。IVは長野原町文化財調査委員長坂寄富士夫氏が担当。VIは(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の大江正行氏にお願いした。
8. 本遺跡出土遺物及び記録類は群馬県吾妻郡長野原町教育委員会が管理・保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に御意見、御指導を戴いた。

群馬県教育委員会文化財保護課、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県中之条土木事務所、茂木涉、川原嘉久治、斎藤玲子、坂寄富士夫、株式会社測研(敬称略)
10. 発掘調査に協力してくれた方々は、次のとおりです。(敬称略　順不同)

小出庫雄、萩原仁、嶋村和作、竹渕みずゑ、市村智恵、山本光明、竹渕由紀子、野口修男、内海吉朗、  
桜井光煥、桜井佳世子、坂井春栄、山口正太郎、篠原喜久、篠原なみえ、茂木福太郎、黒岩峰吉、  
唐沢弘子、足立千代子、浦野友次、浦野多恵　　(地元の人々)  
野口祐治、篠原玲子、小林理(大学生)  
新井弘之、片貝友久、斎藤雪彦、増田祥久、宮腰俊寛、湯本悟、丸山広、田中英人、割田徹、岡島洋貴(長野原高等学校生徒)

# 目 次

序 文  
例 言  
目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と周辺の遺跡	1
III	調査の成果概要	3
IV	柳沢城の歴史的背景	4
V	検出された遺構	5
VI	出土遺物	29

写真図版



# I 調査に至る経緯

長野原町における国道406号線は、横壁地区の須賀尾崎から小倉の集落を通り、国道145号線とつながっている。中之条土木事務所より、国道406号道路改良工事の計画が実施される運びとなり、県教育委員会文化財保護課と町教育委員会は町内遺跡詳細分布調査を基に、この改良工事が遺跡包蔵地区を通過する可能性があるか検討した。

その結果、中世の山城跡（柳沢城跡）の一部に道路が開通することが確認されたため、県教育委員会文化財保護課と町教育委員会は県土木道路建設課および中之条土木事務所など関係機関と協議を重ねた結果、設計変更は難しく遺跡を破壊する恐れがあるため、道路予定地部分につき急きよ発掘調査を行い記録保存することになった。

発掘調査は、平成4年度から平成5年度にかけて実施された。平成4年度は8月1日より行い、調査面積は3,403m<sup>2</sup>で、平成5年度は5月26日より行い、面積は2,701m<sup>2</sup>である。長野原町教育委員会は白石光男を発掘担当者とし、県教育委員会文化財保護課の指導のもとに発掘調査を実施した。

# II 遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡は、長野原町大字横壁の南方に位置し、国道145号線にかかる弁天橋から約1キロメートル西南方向にある丘城に位置する。

北は吾妻川の急流を見下し、西は鷹見塚、南は丸岩の岩峯を頂き須賀尾崎に通じる。東は険阻な堂岩山がそびえ立っている。

遺跡地は、古くからジョッピラと呼ばれ、山城部と丘城部からなり、丘城部は東に舌状に伸び城の中核部分を形成している。また、この城付近は、桐屋と呼ばれ昔の街道が通っており、現在でも道しるべが存在しその名残がある。

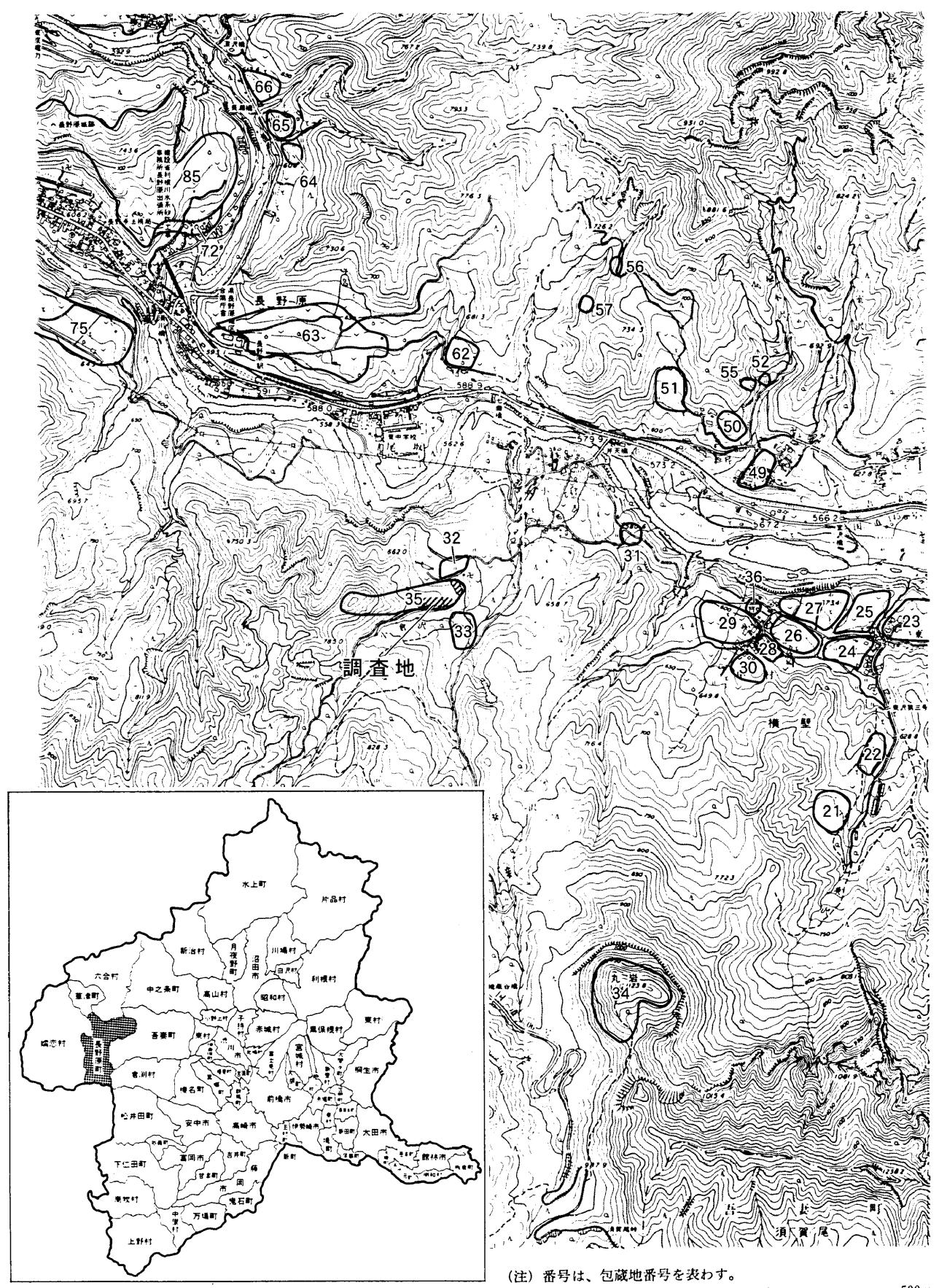
標高は約670メートルを測り、昔、長野原町の採草地であったが今では雑木林になっている。

周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	備考	包蔵地番号
1	上野I遺跡	散布地	縄文中期平安	21
2	上野II遺跡	散布地	平安江戸	22
3	勝沼遺跡(東平遺跡)	散布地	縄文中・後期平安 江戸	23
4	上野III遺跡	散布地	平安	24
5	上野IV遺跡	散布地	縄文中期	25
6	山根I遺跡(中村遺跡)	散布地	平安	26
7	観音堂遺跡	散布地	縄文前・中期	27
8	山根II遺跡	散布地	平安江戸	28
9	山根III遺跡	散布地	平安	29
10	山根IV遺跡	散布地	縄文中期 平安	30
11	西久保I遺跡	散布地		31
12	西久保II遺跡	散布地	平安	32
13	西久保III遺跡	散布地		33
14	丸岩城跡	城館跡		34
15	柳沢城跡	城館跡		35
16	諏訪神社の大権	その他		36

No.	遺跡名	種別	備考	包蔵地番号
17	中棚遺跡	散布地	平安	49
18	榆木I遺跡	散布地	縄文中期 平安	50
19	榆木II遺跡	散布地	縄文中期 平安	51
20	大乗院堂跡	その他		52
21	滝沢觀音岩陰	岩陰		55
22	蜂ツ沢岩陰	岩陰		56
23	御嶽山岩陰	岩陰		57
24	幸神遺跡	散布地	縄文中期平安江戸	62
25	一本松遺跡	散布地	縄文前・中期・後期	63
26	東貝瀬I遺跡	散布地	縄文前・中期・後期	64
27	東貝瀬II遺跡	散布地	縄文中期	65
28	東貝瀬III遺跡	散布地	縄文中期	66
29	鳴木I遺跡	散布地	平安	72
30	向原遺跡	散布地		75
31	長野原城跡	城館跡		85

(注) 遺跡名及び包蔵地番号は、長野原町教育委員会刊行の「長野原町の遺跡」による。



第1図 周辺の遺跡

### III 調査の成果概要

柳沢城は、中世の山城であり、舌状台地を利用した城郭である。

平成4年度の調査（1区）では、道路部分の範囲での調査であるが城の中核をなす部分が含まれていたことは、意義のある工事であった。

本調査で確認できた主な遺構は、郭跡、堀切り、土居、礎石、腰曲輪、石組み遺構等である。一郭部分では、一間間隔の礎石が検出し建物の存在が確認できた。

また、堀切りは一郭と二郭を断つ、幅約11メートル、深さ約4メートルのU型の空堀理（堀切1）、二郭と三郭を断つ幅約1.8メートル、深さ約1.7メートルのV型の空堀り（堀切2）が確認出来た。現況では、掘切りの存在はわかっていたが、その形状まではハッキリとしなかった為、今回の調査でその形状が確認できたことは大きな成果であった。

特筆すべき遺構として、一郭部の土居頂上部に造られていた石組み遺構が上げられる。偏平な石を組み合わせて箱状に造られており、五石の石で蓋がされていた。この遺構は堀切りに開口しており、その使用目的は判断しかねる。この石組遺構の検出により中世の城郭構造を考える上で貴重な資料が得られた。

出土遺物に関しては、予想以上の成果があり、その大半は一郭部分からの出土である。

中世の陶器片が約500点まとめて出土したことは、めずらしく注目に値する。内容的には、14～15世紀頃の常滑、美濃、古瀬戸などの太平洋側の陶器や13～14世紀頃の景德鎮など中国伝来の陶器も出土している。また、県内では初めての日本海側の須恵系陶器などの出土も見られ、日本海側との交流を考えるうえでも大きな成果が得られた。その他、鉄製品（釘、矢ジリ等）や銅製品（装飾用か？）などの出土、穀物（豆類）の炭化物の出土等の遺物が検出された。

平成5年度の調査（2区）で確認できた遺構は、柳沢城のものと思われる幅50cm、深さ20cmほどの溝跡2本と穴列（直径20～40cm、深さ10～85cm）縄文時代の落とし穴（長径180cm、深さ100cm）3基、直径1m前後の土坑等である。また、鉄斧1点（時期不明）、中世時代の石臼片2点、貨幣2点が出土した。

以上の遺構、遺物の出土により、今までの伝承の中だけで考えられていた、柳沢城の実体がより明確になってきたことが、今回の調査の最大の成果である。

尚、この調査が、今後中世の城郭研究の一資料になれば幸いです。

## IV 柳沢城の歴史的背景

国道145号線の弁天橋から大字横壁に入り、旧草津街道を1キロ程登った所の柳沢（小倉沢）の渓流の北側にある柳沢城は、中世のころ城があったと言われているこの城は此処から3キロ程の所にある丸岩城と合わせて、丸岩の要害として加沢記などに載っている。旧草津街道は須賀尾峠で信州街道と別れて、深沢に沿って下り、桐屋を経て長野原の久々戸から琴橋を渡り、長野原から草津に至る街道である。柳沢城はこの桐屋の南側の丘陵地にある。丘陵頂上部に鷹見塚があり、南に須賀尾峠、東に険阻な堂岩を望む要害堅固の場所である。鷹見塚は物見廊として羽根尾城と丸岩城との中継点としての働きがあったと思われる地点である。城の形状は舌状台地を利用した山城になっている。

加沢記によれば、この頃西吾妻は、上杉、武田の両雄が、鎌原、下屋、湯本、羽根等の郷土を戦いの渦中に巻き込んで争っていた。そこへ、真田の一族が武田の配下として西吾妻を領有しようと策略を練って、岩櫃城を落とし兵を進めて、東吾妻をも席巻し、沼田の城主となつた。一方、北条氏は北上州を手に入れ、上洛の背後を安全なものにするためにこの争いの中に入ってきたという所謂戦国の時代であった。

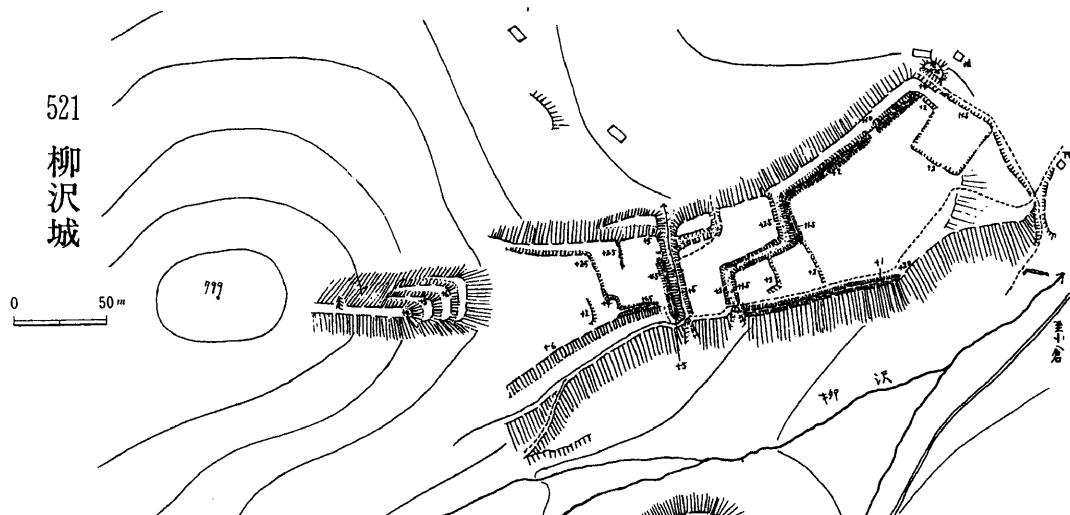
加沢記の中から、丸屋の要害に関する記録は次の通りである。

永禄6年（1563年）10月下旬、真田昌幸、矢沢頼綱は五百余人を引き連れて、大手三島の陣所に向かう時、この丸屋の要害を通ったと記されている。大戸真楽斎、弟但馬守の両名は二百余人は、須賀尾峠の丸屋の要害に陣押したと。

また天正10年（1582年）8月下旬、北条氏が吾妻に進入を企図したとき矢沢薩摩守が岩櫃に出陣の際、須賀尾口には湯本、西窪、横谷、鎌原を置く、長野原の砦は湯本の居城であった。天正17年（1589年）8月、北条氏が再度吾妻に進入を企図したとき、この城には鎌原、湯本三郎左衛門、西窪治郎、西窪甚五右衛門を配置する。

沼田盛衰記には、天正16年ころ、横河辺、丸屋の城には鎌原宮内、羽根入道、横谷左近、湯本三郎左衛門、大戸に真楽斎後に大戸豊後、菅尾に羽根某、羽根に羽根入道と書かれている。

以上、加沢記を基本に長野原町誌、吾妻城墨史などを参考に、柳沢城について調べてみたが、いつ作られて、いつ廃城になり、どんな人がいたかは全く不明であるが、今回の調査の結果などから考えると、丸岩城の生活の為の場であったのではないかと推測できる。一旦緩急あれば丸岩城に入り、戦ったであろうと思える。



『群馬県古城墨跡の研究 下巻』より抜粋

# V 検出された遺構

## 1. 1区検出遺構

1区は丘陵尾根を切断した平坦面や土居、堀切が認められており柳沢城の中心施設の南半にあたる。遺存している遺構によって語っていた本遺跡が発掘調査によって明らかとなった意味は大きい。特に整地平坦面に礎石建物の存在が確認されたこと、また、同所より炭化した穀類、豆類及び各種遺物が出土したことは注目に値する。

1区は尾根の削平と堀切とによって4地区に分割される。西尾根地区、削平による整地地区（第1郭）、堀切－1と堀切－2に挟まれた中央地区（第2郭）、堀切－2の東に位置する東地区（第3郭）である。

### 検出遺構

西尾根地区＝土居1基、集石2基、礎石状集積1基、土坑1基、ピット3基。

第1郭地区＝尾根削平整地1面と建物遺構礎石列2列、堀切1条、土居1基、土居に伴う石組遺構（暗渠か）1基、集石2基。

第2郭地区＝堀切1条、土坑1基。

### 西尾根地区的遺構

**土居－2** 西尾根地区の東端で、尾根を切断して平坦に整地した第1郭の南側を囲い込む土居である。一旦ローム層の上面を削平し盛土を施す。丁寧に地ならしを施しており、盛土中に黒色土の堅く締まった面が認められる。Q－5グリットまでが盛土にあたる。幅下端で6.5m～8.5m、上端で1.0m～2.3m、東西長17.0mの規模で、北斜面は整地面から比高差0.5m～1.0m、南斜面は角度をもって削り比高差2.0～2.5mを造りだしている。土居南裾部には狭い腰曲輪が巡る。土居の東端土居－1との接合部は、僅かに道状に凹み、南の曲輪に繋がっている。

**集石－1** 標高697.6mの傾斜面P－3グリットで検出している。20cm程の大きさの割石を南北0.8m東西0.75mのほぼ円形に配置している。外周の石は縦に差し込まれ、中心部は平置きであるが、特に水平を意識したようには見られない。柱の根堅めか。

**集石－4** 標高695.8mの傾斜面、Q－5グリットで検出している。第1郭削平崖上に位置する。30cm～40cm程の大きさの平坦な石を6個配置し周辺に割石を集め。南北1.2m東西1.6mで形状は不定形である。その位置から東の整地面の遺構と関連する施設の一部、或いは土止め用かと推測する。

**礎石－1** 純石状に集石されていた。標高696.2mの傾斜面でQ－4グリットで検出した。

第1郭削平崖上で南の土居上に位置する。40cm～50cm程の大きさの平坦な石を4個ほぼ菱形に配置する。

**土坑－1** Q－1グリットから検出した。長軸1.45m 短軸1.26mのほぼ円形の平面形状を呈し、底面は凹凸が

認められる。深さは0.56mで覆土の黒色土上面より粉吹き状の白色釉陶器皿片が出土している。

**ピット（1～3）** P-2グリットから3基検出した。ほぼ直線上に並ぶ。方向はN-5°-Wである。3基とも上面は崩れて不定形であるが底面の形状は円形である。規模は以下のとおり。

名 称	形 状	長 径	短 径	深 さ	柱 間
P 1	円形	38	25	43	P 1～P 2間 220 P 2～P 3間 220
P 2	円形	39	39	46	
P 3	円形	22	20	23	

(単位cm)

## 第1郭地区の遺構

### 整地面（第1郭）

調査区の西部で検出した。西から東に向かって下がる尾根を削り出して比較的広い平坦面が造られている。尾根中央部ではほぼ南北に切断し、P-4グリットの南で東にL字に折れ、さらに南に折れてQ-6グリットで東向になる。西辺は現状で2.40mの崖を造りだす。切断崖の方向はN-157°-Eである。また、崖下端部および整地面に焼土、炭化物が認められ、本区画内の施設の被災が推測出来る。整地面の西より上面から西尾根上から落ち込んだ石が数個認められているが、その数量からみて西側崖面に何らかの施設の存在は考えられない。崖下端部はその南から南辺に箱状の切り込みが認められることから、整地面の施設の一部が考えられる。東は尾根を切断する堀切と土居により、南は尾根を利用した土居によって区画している。調査区画内での平坦面面積は約258m<sup>2</sup>である。平坦面からは礎石列が2列確認できた。

#### 検出遺構

尾根削平整地面1面、建物遺構礎石列2列、堀切1条、土居2基、土居に伴う石組遺構（暗渠か）1基、集積2基。

**礎石列－3** 西切断面に沿って礎石4個が並ぶ。崖面下端部からの距離は南で0.5m、調査区北端で1mである。石列の方向はN-160°-Eである。石は30cm～40cmの上面平坦な割り石で、整地面を僅か調整して据えている。各礎石間の距離は南から5.40m、1.85m、1.95mである。礎石間は約6尺の間隔で礎石を据えていると思われるが、中間に凹みが認められるため、1ないし2個の礎石があったと推測できる。礎石列に沿うようにして陶磁器、銅製品、鉄製品が出土している。また礎石列南端周辺から小豆、粟と思われる炭化した物が出土している。遺物は礎石列の東側に集中する。西礎石列から3.46mの東中央部に2石検出したが、大きさも小さく平坦面の少ない石であることから中心的礎石とは考えにくい。

**礎石列－2** 整地面の南西部P-5グリットで検出した。尾根切断の崖が再び南行してつくる隅に4石が台形に並び、さらに北側に2石並ぶ。各礎石間の距離は1.08m～1.46mである。4石に隣接し、L字に土坑が認められる。

**堀 切－1** 尾根を切断して南北に走行する柳沢城最大の堀切である。O-9グリットからS-11グリットに

かけて調査した。台形の断面形状で底面は平坦である。上端幅4.40mで底面幅2.20m、深さは西側土居上面から4.20m、東側で1.60mである。走行方向はN-175°-Eで南端はS-10グリットで西に回り込んで南の柳沢に落ちると思われる。

**土 居-1** 堀切-1の西側に土を盛り上げる。走行方向は堀と並行してN-163°-Eである。南部では堀切に沿って西に回り込む。裾部幅4.0mで整地面からの高さは0.5m~1.2m、堀切-1の最深部との比高差は4.2m~5mである。調査した長さは1.90mである。断面土層からは西の整地面方向から盛土を行っていると観察できる。盛土中の黒色土の堅く締まった面が認められる。本土居上には集石と石組遺構（暗渠か）が検出した。

**石組遺構** 土居-1の南部Q-9グリットで検出した。土居-2の東端の延長線上に位置する。石を組んで箱状としたもので、土居の水抜き施設（暗渠）かと考えられる。長方形に調整した平石を堀側東西方向に2列南北方向に2石据え、側面は2石2段の平積みで西端の1石は上面を揃える。蓋石として長方形の5石を南北方向にのせる。また測石の裏込めとして不定形な石を充填する。底石の据えられている範囲は35cm×72cmで、測石の高さは約25cmである。よく突き固めた面の上に底石を据えていることが土層から観察できる。

**集 石-3** 土居-1の北部N-9グリットで検出した。土居の頂部に位置する。平らで不整形の割り石が南北2.5m、東西1.6mの範囲に認められた。西ブロックと東ブロックに分離でき、比較的密集し土居の頂部に沿うようにある事から、何らかの施設とも考えられるが確定できない。

**集 石-2** 整地面の中央北よりO-6グリットで検出した。標高は694.0m~694.5mに位置し全体に傾斜を持つ。石は不定型の割り石が中心で、その配置に一定の規則性は見られない。

## 第2郭地区の遺構

**堀 切-2** 第2郭地区の東を切る堀切でP-13~P-15グリットにかけて僅かに弧をえがいて南北方向に掘削されている。断面形状は台形で中段で傾斜を変えて下部は箱形である。上端幅1.70m、中段幅0.60mで底面幅0.35m、深さは西側で2.95m、東側で1.35mである。底面は北から南に傾斜を持つ。南北の比高差はおよそ0.68mである。走行方向はN-163°-Eで南端はS-15グリットで西に回り込んで南の柳沢に落ちると思われる。底面は北から南に傾斜を持つ。南北の比高差はおよそ0.68mである。埋土中に東西両方からのロームブロックの流入が認められる事から、現状では確認できなかつたが堀の両側に多少の土盛りがあつたと思われる。本堀切は現状で明瞭に凹地として残っており、調査区外の北側に伸びる。

**土 杭-1** P-13グリットで円形の落ち込みが確認出来た。

**その他** このほか堀切-1の東側に僅かな高まりが観察できる。土層断面からは明確な盛土と判断できないが、堀端部に一定の施設の存在をうかがわせる。また堀切-1と2の間はおよそ12mであり、東西の比高差は約1.3mである。

### 第3郭地区の遺構

調査区の東端に位置する第3郭地区は北側にトレンチを入れたが、明瞭な遺構は認められない。現況で堀切－2の東側に低い土居状の高まりが認められ、調査区東端に堀切を思われる凹地が残ることから、区画され独立した郭と考えられる。遺構の本体は北側に存在するとと思われる。また調査第2区の遺構群との関連も考えられる。

## 2. 2区検出遺構

2区では、北東部の整地面のほか、溝状遺構2条、土坑3基、落とし穴3基、ピット10基、特殊遺構2基（風倒木痕か）を検出した。

### 陥し穴

3基検出している。内2基は底面が長方形の平面形状を呈し、他の1基は正方形を呈する。

陥し穴－1 K-33グリットで検出した。平面形状は上面では隅丸長方形を呈し、

中央部にくびれ持たない。小ピットが底面の西短辺中央に1個、東短辺中央に2個認められる。断面形状は台形である。規模は上面で178cm×125cmで底面で153cm×62cmで検出面からの深さは123cmであり、底面積は0.95m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-180°-Eで方向は傾斜に並行する。

陥し穴－2 I-33グリットで検出した。平面形状は上面では円形を呈し、底面では方形を呈する。底面に小ピットが4箇認められる。断面形状は台形で、底面は平坦である。規模は上面で138cm×120cmで底面で60cm×53cmで検出面からの深さは116cmあり、底面積は0.32m<sup>2</sup>である。埋土より縄文土器深鉢片（第40図-1、図版9-1）が出土している。

陥し穴－3 E-32グリットで検出した。平面形状は上面、底面とも長方形を呈する。中央部に括れを持たない。底面に小ピットが認められない。断面形状は箱形である。規模は上面で147cm×82cm、底面で123cm×50cmで検出面からの深さは97cmであり、底面積は0.62m<sup>2</sup>である。長軸方位はN-176°-Eで、方向は傾斜に並行する。

### 土杭

3基検出しているが、平面形状が隅丸方形ではっきりとした掘り込みを持つものは1基のみで、他の2基は不整形な平面形状で掘り込みも浅い。

土杭－1 K-33グリットで検出した。平面形状は不整形のL字状で浅い掘り込みを持つ。底面は凸凹である。規模は上面で194cm×171cmで検出面からの深さは19cmである。南よりで上面偏平な河原石が出土している。

土杭－2 I-34グリットで検出した。平面形状は隅丸方形である。断面形状は台形で底面はほぼ平坦で

ある。規模は上面が69cm×66cmで底面が53cm×52cm、検出面からの深さは46cmである。底面積は0.28m<sup>2</sup>である。

**土 杭－3** D－32グリットで検出した。平面形状は不整形の隅丸三角形で、掘り込みは浅く底面に凸凹がある。規模は上面で168cm×73cmで検出面からの深さは7cmである。北よりで鉄斧が出土している。

### ピット

10基検出している。内9基は柵列状に並ぶ。柵列は北西ブロック（ピット2からピット5・柵列－1）と東南ブロック（ピット6からピット10・柵列－2）の2ブロックに分かれる。その位置と方向から一連の施設と考えられる。西側に見られる整地面との関連性を伺わせる。柳沢城の東側の区画施設と推定出来よう。

**ピット－1** L－33グリットで検出した。平面形状は不整形の長方形で、底面は傾斜する。底面に斜方向の小ピットが2箇認められる。規模は上面で75cm×43cm、検出面からの深さは35cm底面小ピットは東ピット25cm×15cm深さ63cm、西ピット16cm×13cm深さ6cmである。

### ピット－2から5

**(柵列－1)** E－33からF－33グリットにかけて直径20cmほどの円形ピットがほぼ等間隔で並んで検出された。柱間は185cmから200cmで並列方位はN－148°－Eで北東方向にさがる傾斜に対して並行している。北端は鍵の手状に区切られた整地部の東法面にぶつかる。

**ピット5** 南東側に添え柱様の小ピット（無名）が認められる。規模は以下の通りである。

名 称	形 状	長 径	短 径	深 さ	柱 間
P 2	円形	22	20	30	P 2～P 3間200 P 3～P 4間185 P 4～P 5間190
P 3	円形	20	17	14	
P 4	円形	23	28	26	
P 5	円形	17	16	8	

(単位cm)

### ピット－6から10

**(柵列－2)** F－33からH－35グリットにかけて円形ピットがほぼ等間隔で並んで検出された。柱間は230cmから250cmで、並列方位はN－131°－Eで北東方向にさがる傾斜に対してほぼ並行する。また列の南東端は南西側の整地法面に並行して近接する。規模は以下の通りである。

名 称	形 状	長 径	短 径	深 さ	柱 間
P 6	円形	25	25	39	P 6～P 7間250 P 7～P 8間230 P 8～P 9間230
P 7	円形	28	24	18	
P 8	円形	27	26	44	
P 9	円形	36	24	57	

(単位cm)

### 溝状遺構

2区北側で2条の溝状遺構が検出されている。北西方向に下がる傾斜に並行して台地縁辺を区切る1号溝と、2区東北部の谷から北西方向に登って1号溝を横切り、谷を回り込んで下がってゆく2号溝がある。双方とも所謂溝ではなく。、1号溝は台地区画の施設（柳沢壙の三の丸北側の腰曲輪か）、2号溝は踏み分け道と考えられよう。新旧関係は切り合い関係から2号溝が新しいと考えられる。

**1号溝状遺構** C-28からA-31グリットにかけて検出した。南西方向から北東方向に下がる丘陵の尾根北西側縁辺を区切り、調査区外に延びる。溝の底面形状は浅いU字形で、幅は西側20cm、東側では50cm程に広がる。溝を挟んで山側は緩い傾斜を持ち、谷側は幅50cm程の犬走り状の平坦面を持つ、走行方向はN-55°-Eである。

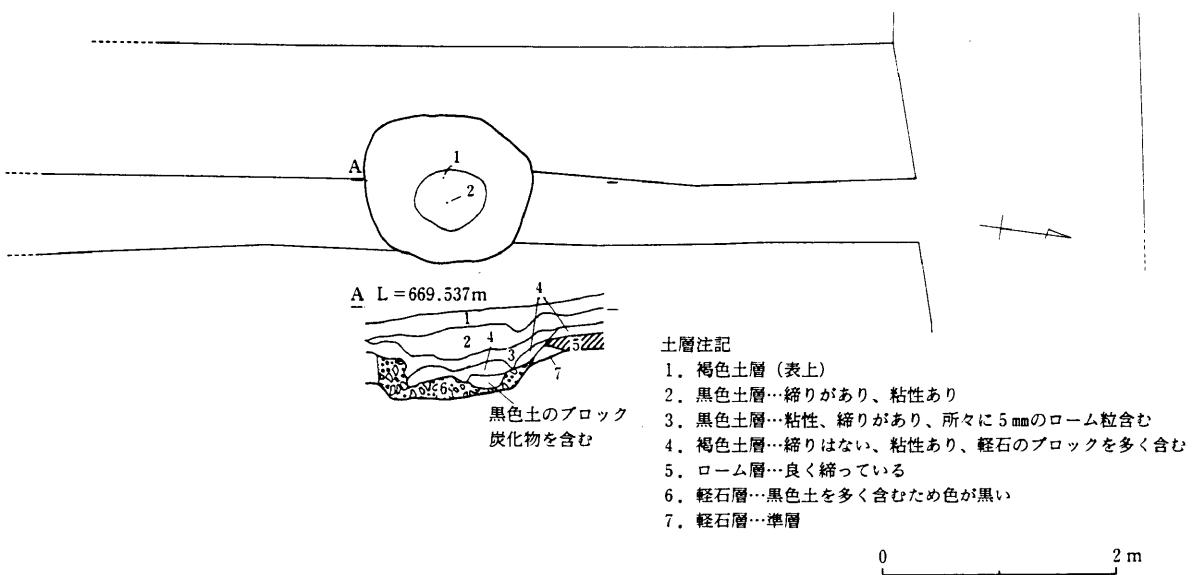
**2号溝状遺構** B-27からD-33グリットにかけて検出した。東北部の谷から北西方向に登って1号溝を横切り北西の谷を回り込んで下がる。検出総長37mにおいて、調査区外に続く。幅は100cmから120cmで底面に平坦面をもつ。

### 特殊遺構（風倒木痕か）

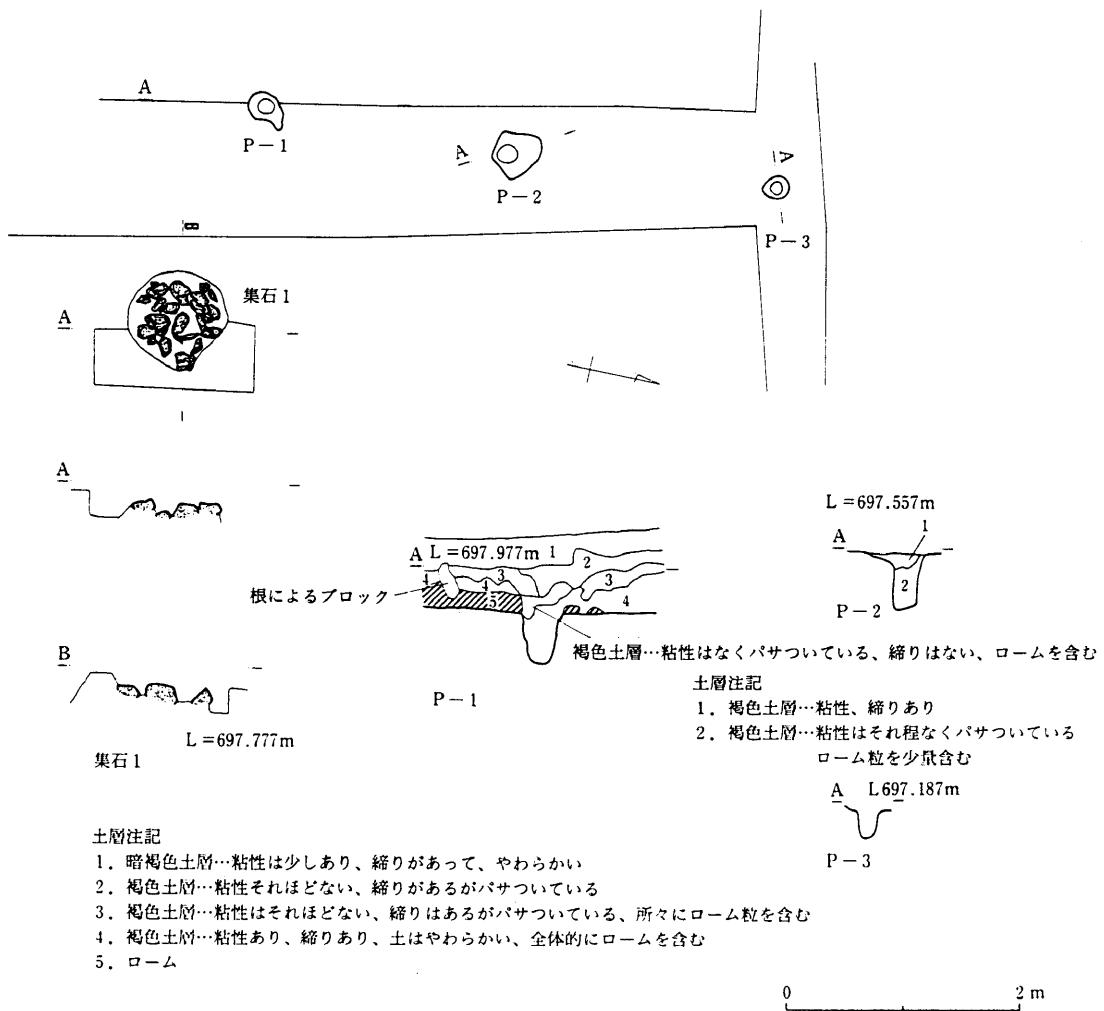
2区東側で2基検出している。土層観察によるとローム層が天地返しになっているが、まとまっており、大変堅地で突き固めたようであった。風倒木痕とも考えたがあまりに堅地であったため、特殊遺構とした。

**特殊遺構1** I-34グリットで検出した。規模は上面で250cm×245cm、深さは検出面から41cmを測る。底面はすり鉢状を呈し凸凹がある。

**特殊遺構2** G-33グリットで検出した。トレンチを十文字に入れ土層観察を行った。規模は上面で298cm×250cm、深さは検出面から88cmを測る。底面はすり鉢状を呈する。



第2図 1区土坑1平面図、断面図



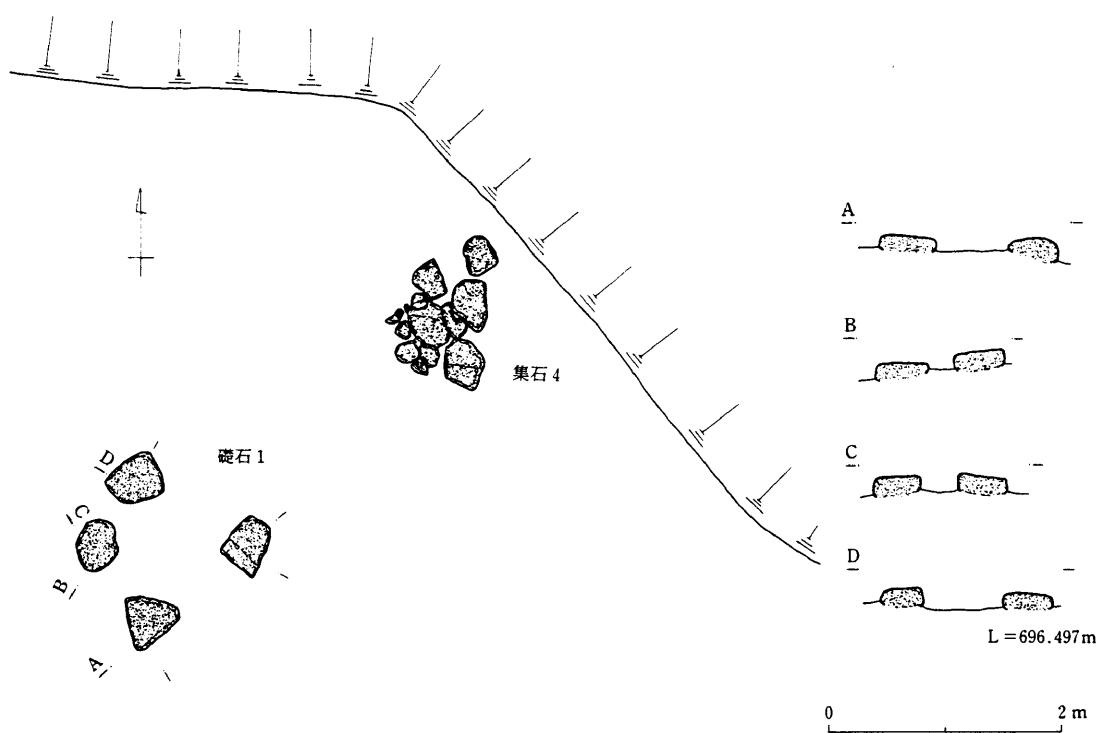
第3図 1区集石1 P-1、2、3平面図、断面図



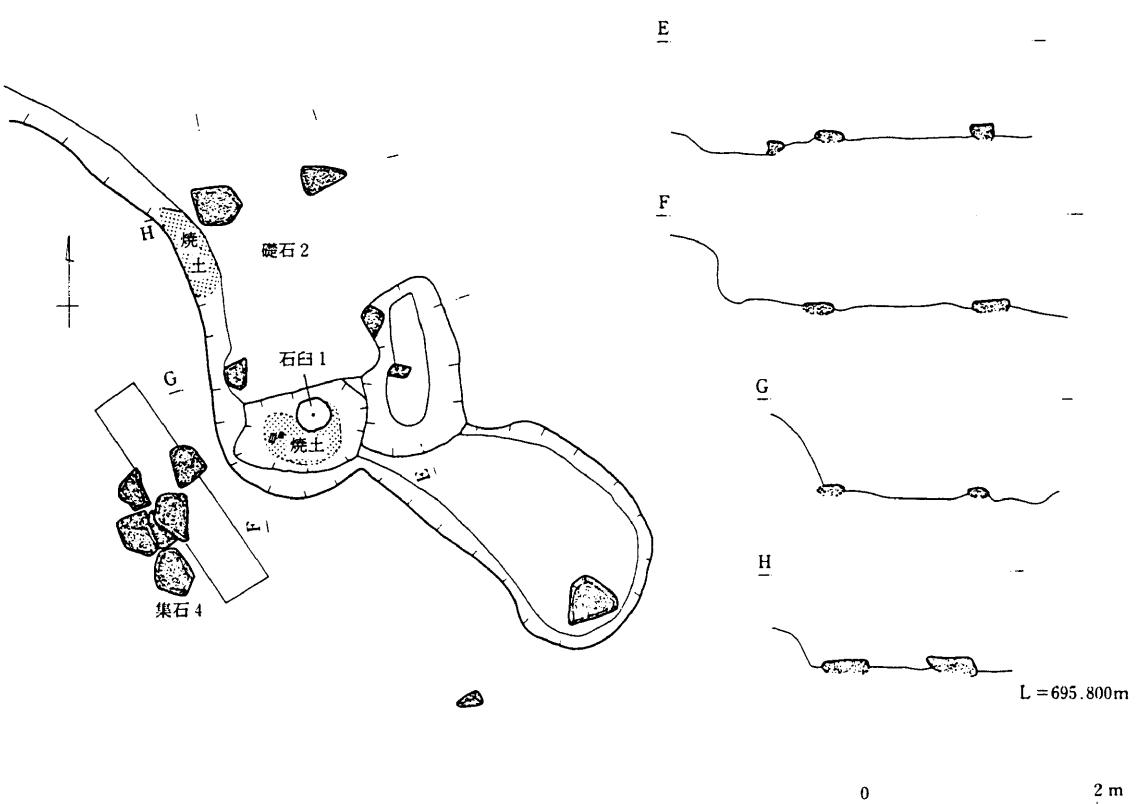
第4図 1区集石2平面図、断面図



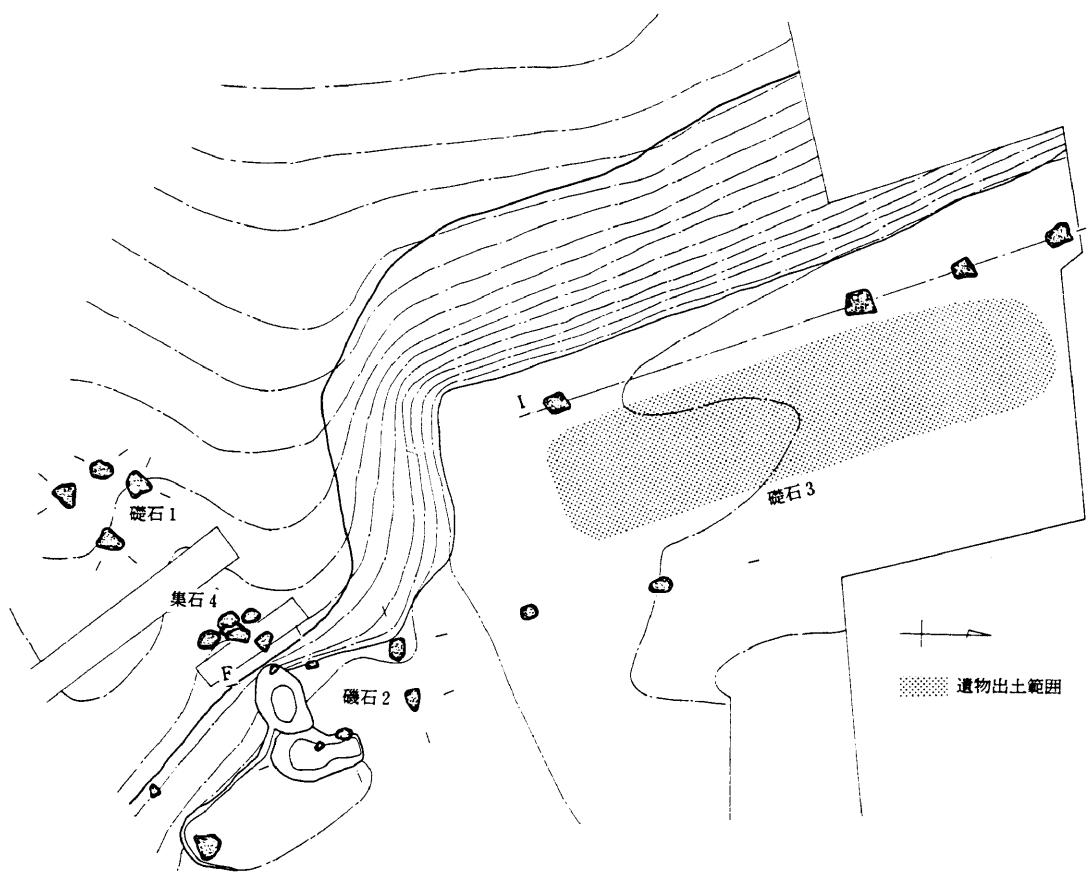
第5図 1区集石3平面図、断面図



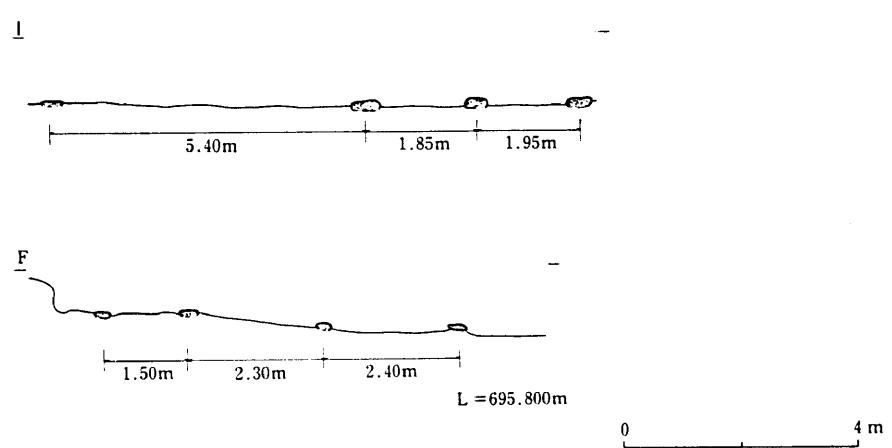
第6図 1区礎石1、集石4平面図、断面図



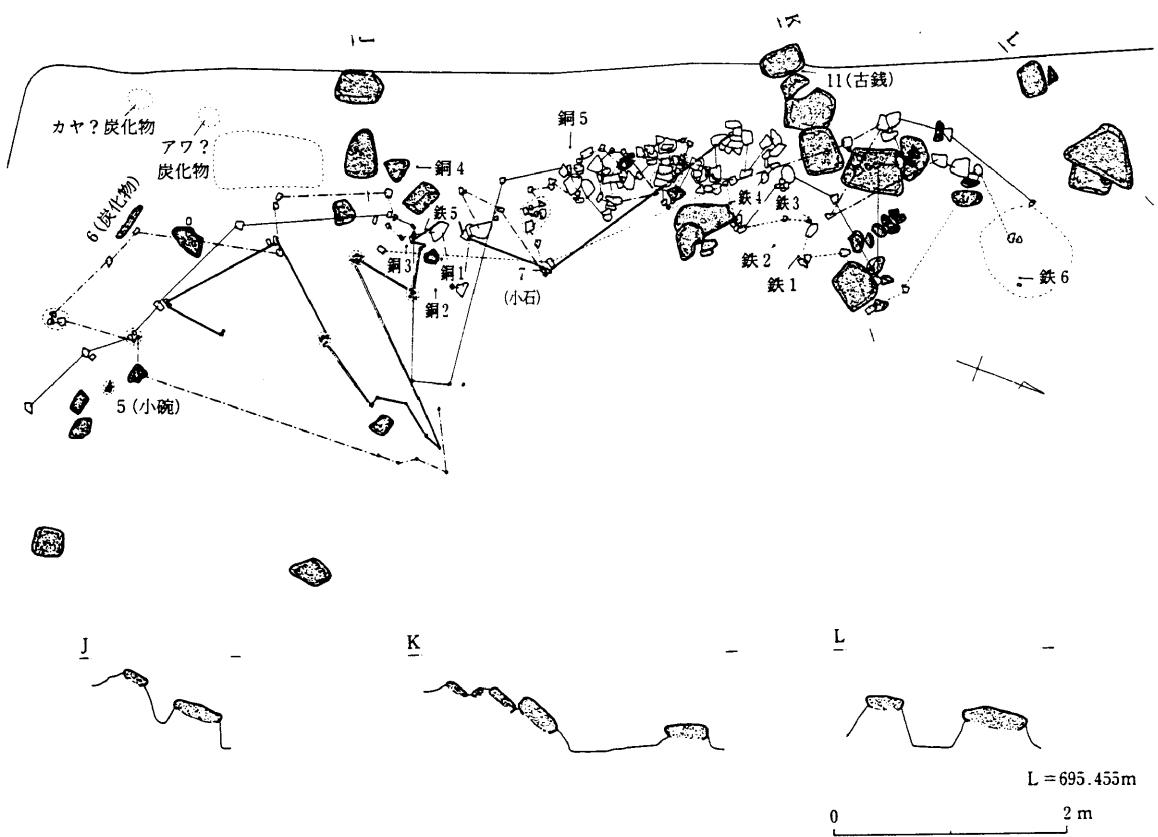
第7図 1区礎石2平面図、断面図



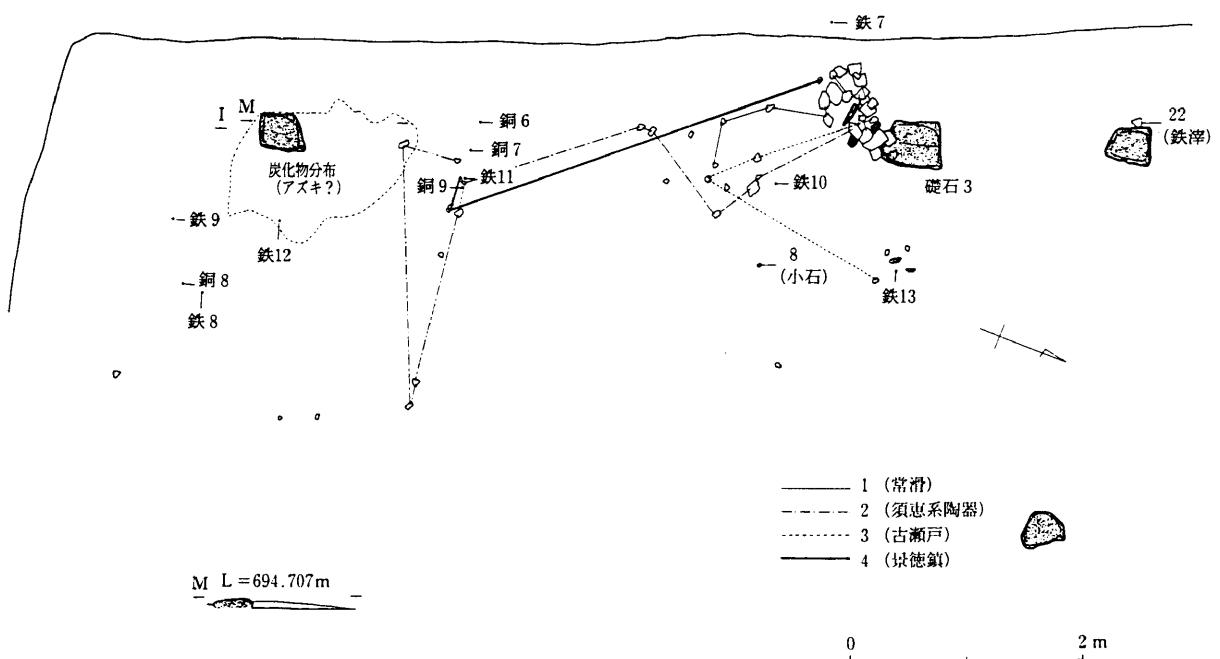
第8図 1区礎石3平面図



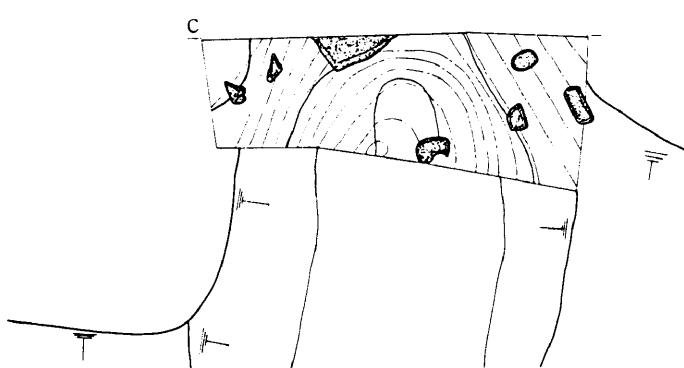
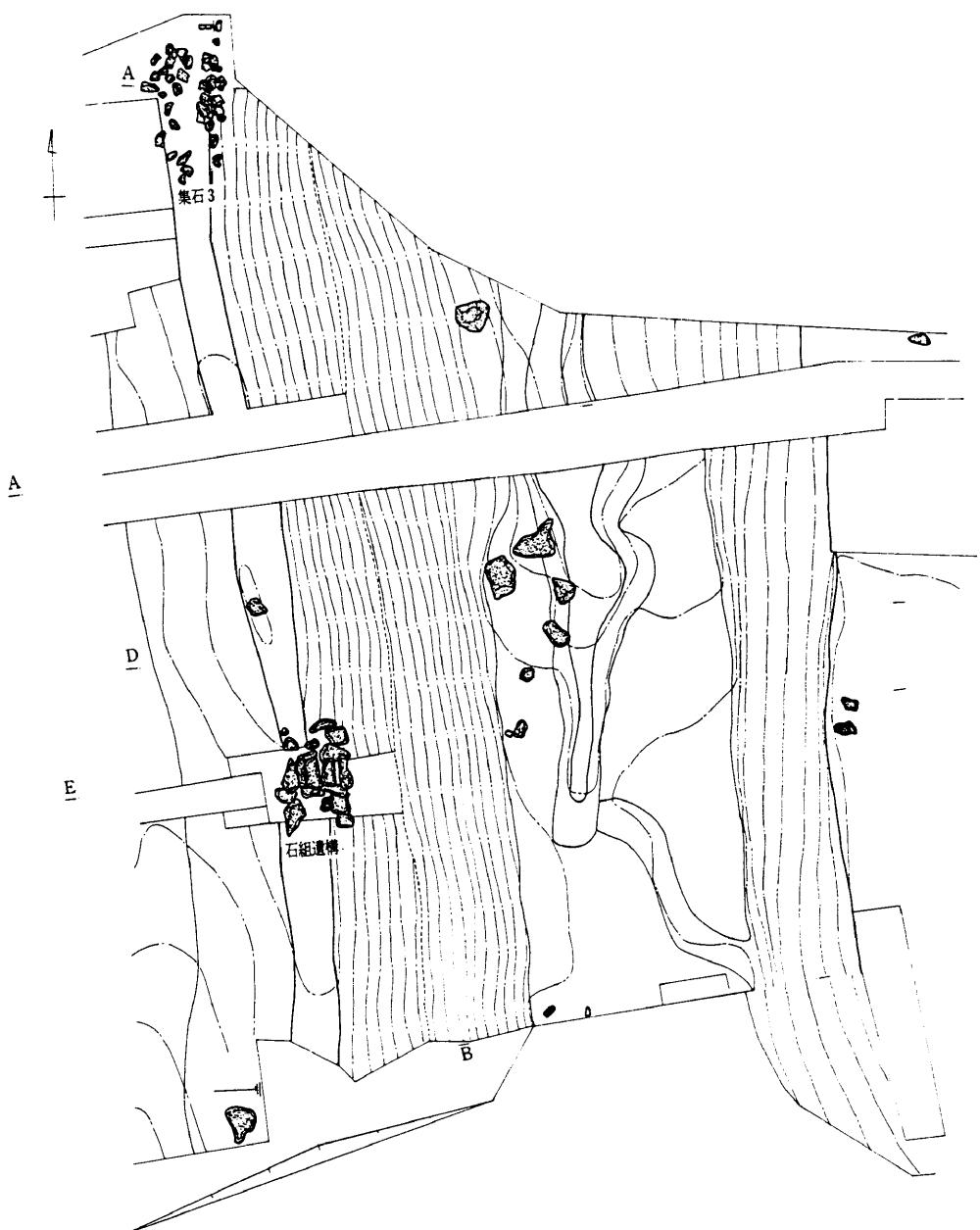
第9図 1区礎石3断面図



第10図 1区礎石3遺物出土状況(1)平面図、断面図

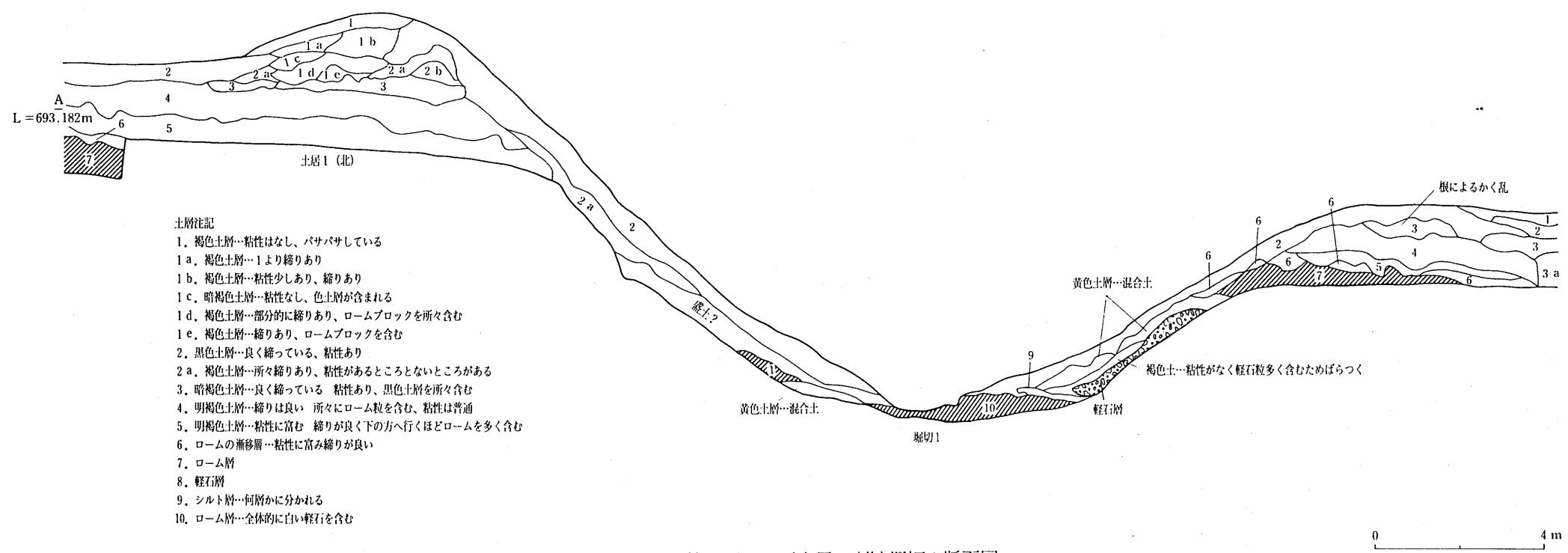


第11図 1区礎石3遺物出土状況(2)平面図

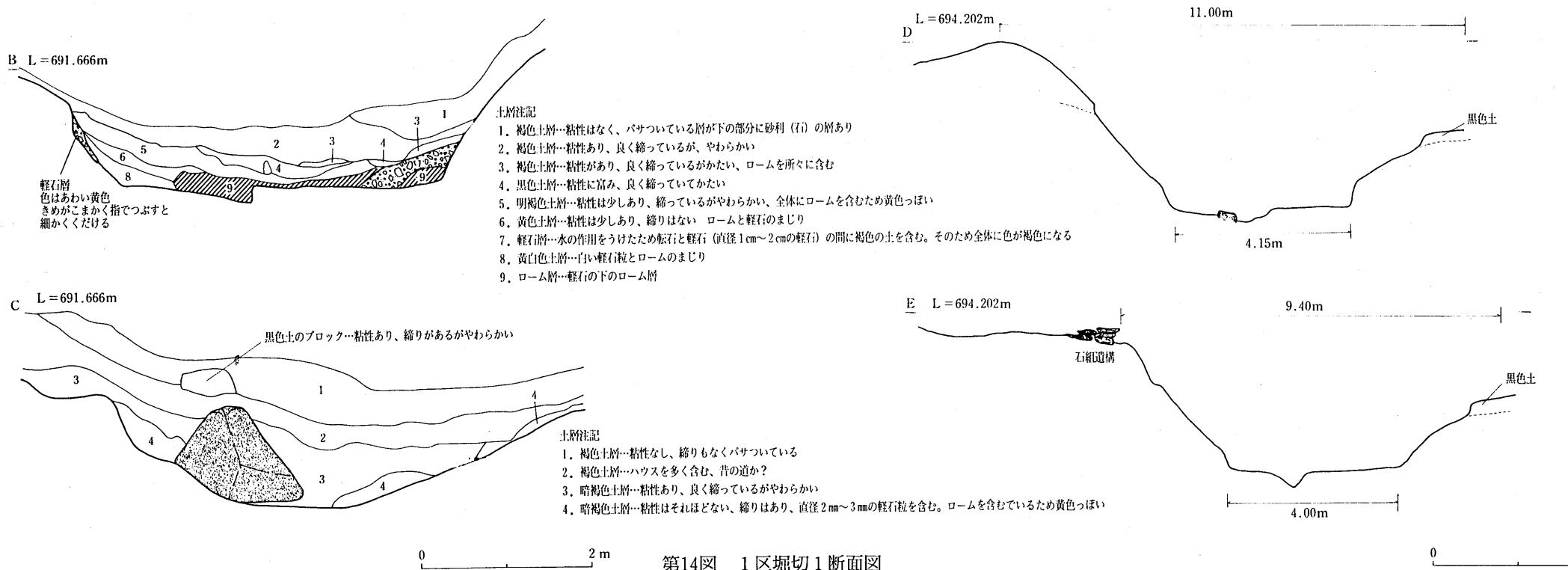


第12図 1区堀切1平面図

0 4 m

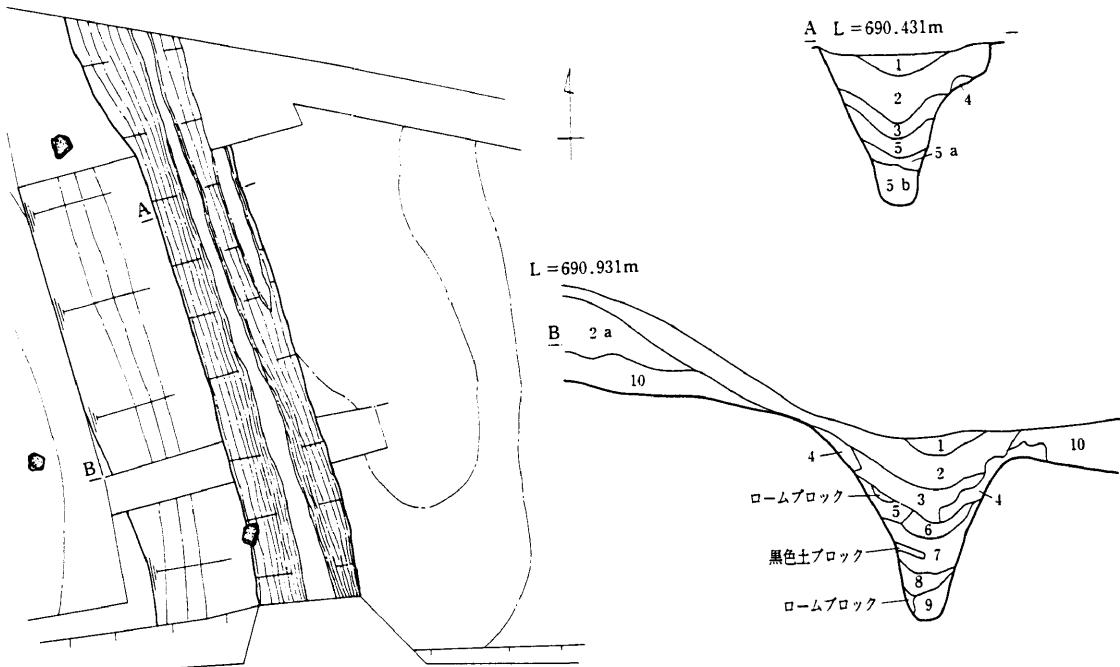


第13図 1区土居1(北)堀切1断面図



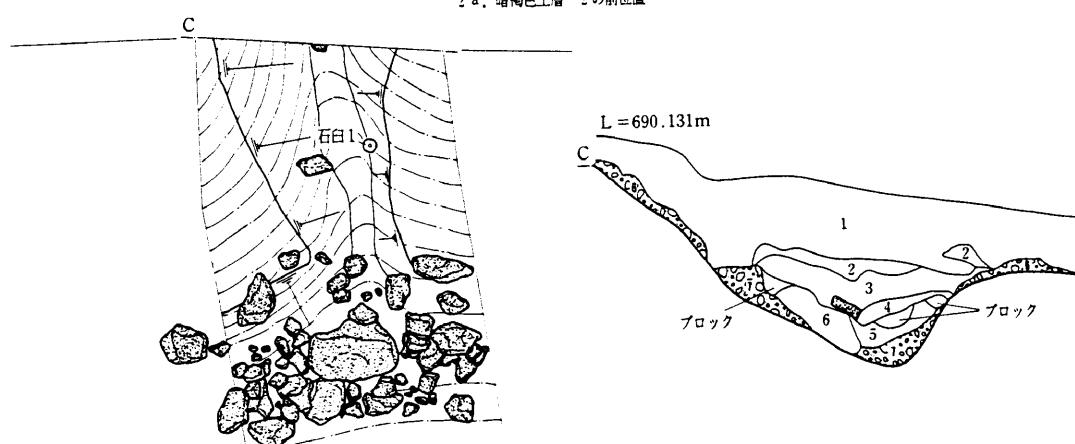
第14図 1区堀切1断面図





土層注記

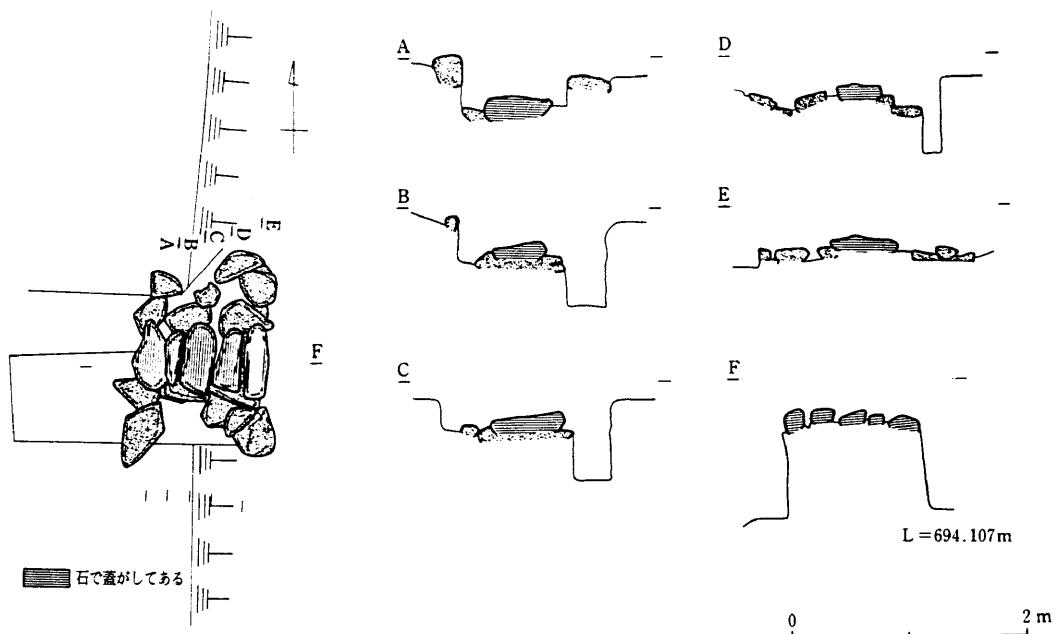
1. 黒色土層…粘性があり、締りがあるがやわらかい
2. 暗褐色土層…粘性があり、よく締っている
3. 褐色土層…粘性はそれ程ないが、締りはある。所々にローム土を含む
4. ロームブロック
5. 褐色土層…締りはそれ程なく、バサついている粘性はなし、ローム土を含む
- 5 a. 暗褐色土層…粘性は少しあり、締りはそれ程ないが、ローム粒を含む
- 5 b. 褐色土層…粘性はまりない、締りはなくバサついている ローム粒を多量に含む
6. 暗褐色土層…ロームブロックを多く含む、粘性は普通、締りはそれ程なし
7. 褐色土層…締りはあまりない、粘性あまりない、軽石粒を多く含む、所々にロームを含む
8. 褐色土層…粘性はなくバサついている、ロームと軽石粒の混合を多量に含む
9. 黒色土層…粘性あり、締っているがやわらかい
10. 褐色土層…粘性があり、よく締っていてかたい
- 2 a. 暗褐色土層…2の前位置



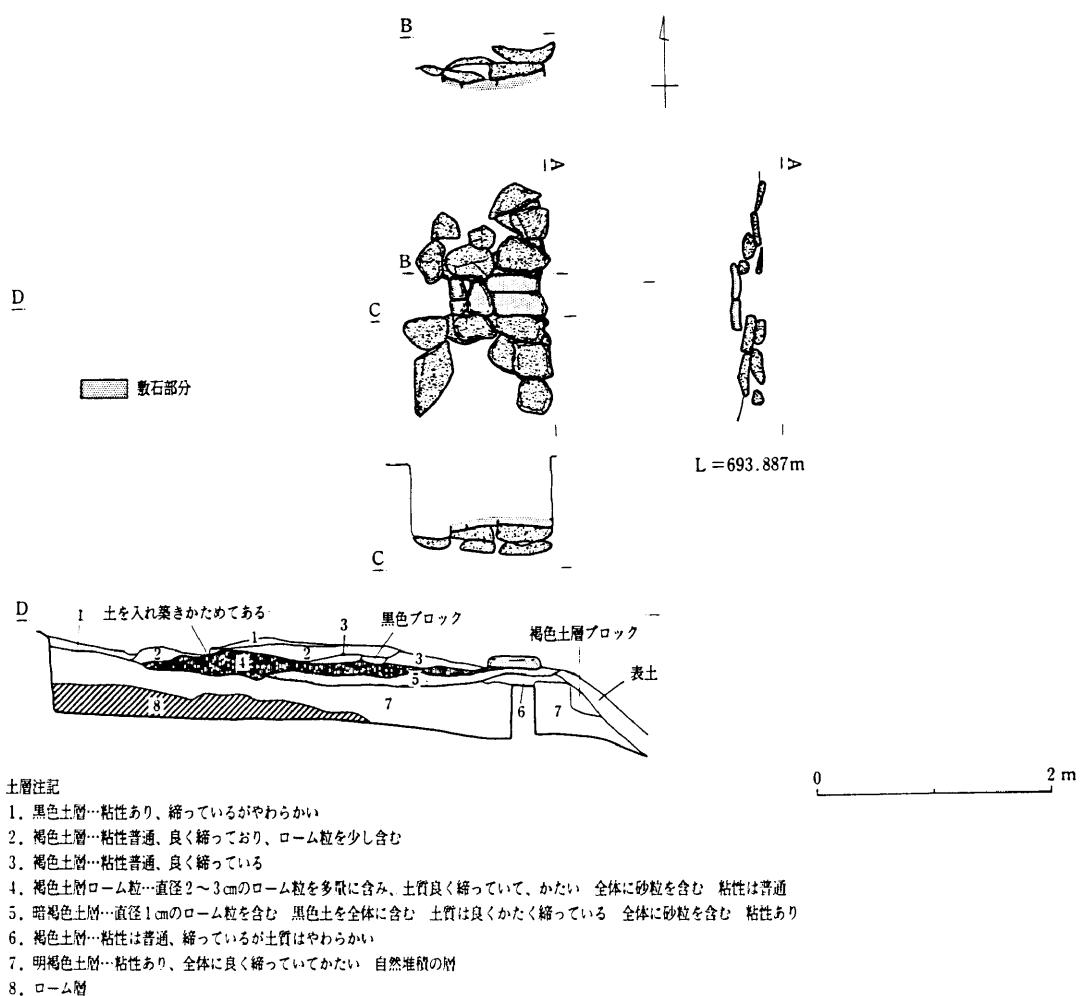
土層注記

1. 明褐色土層…粘性はそれ程なく、締りはあるが、バサついている
2. 褐色土層…粘性少しあり、締りはあるがやわらかい、少しバサつく
3. 暗褐色土層…粘性あり、締りはあるがやわらかい
4. 明褐色土層…粘性はそれ程ない 締りはバサついている 全体にロームを含む
5. 明褐色土層…粘性あり、良く締っている、直徑1cm前後の軽石粒を多量に含む
6. 軽石M…軽石粒を多量に含む  
直徑5mm～1cmの軽石
7. 軽石M…直徑3mm～5mmの軽石

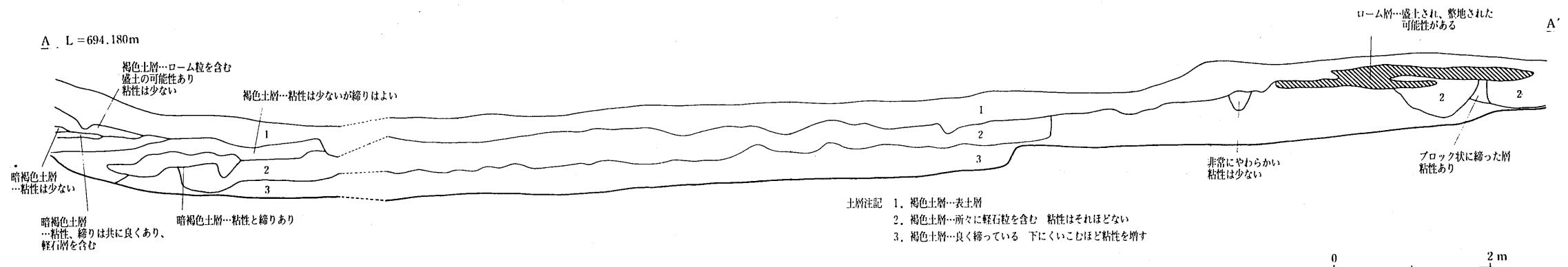
第15図 1区堀切2平面図、断面図



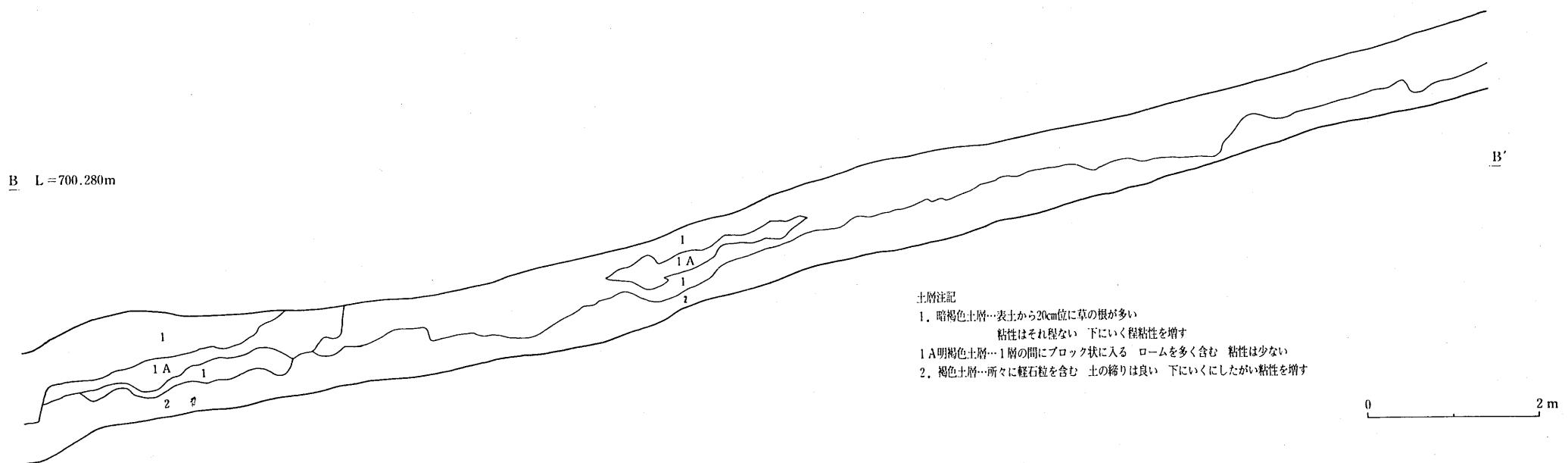
第16図 1区石組遺構現況平面図、断面図



第17図 1区石組遺構展開図

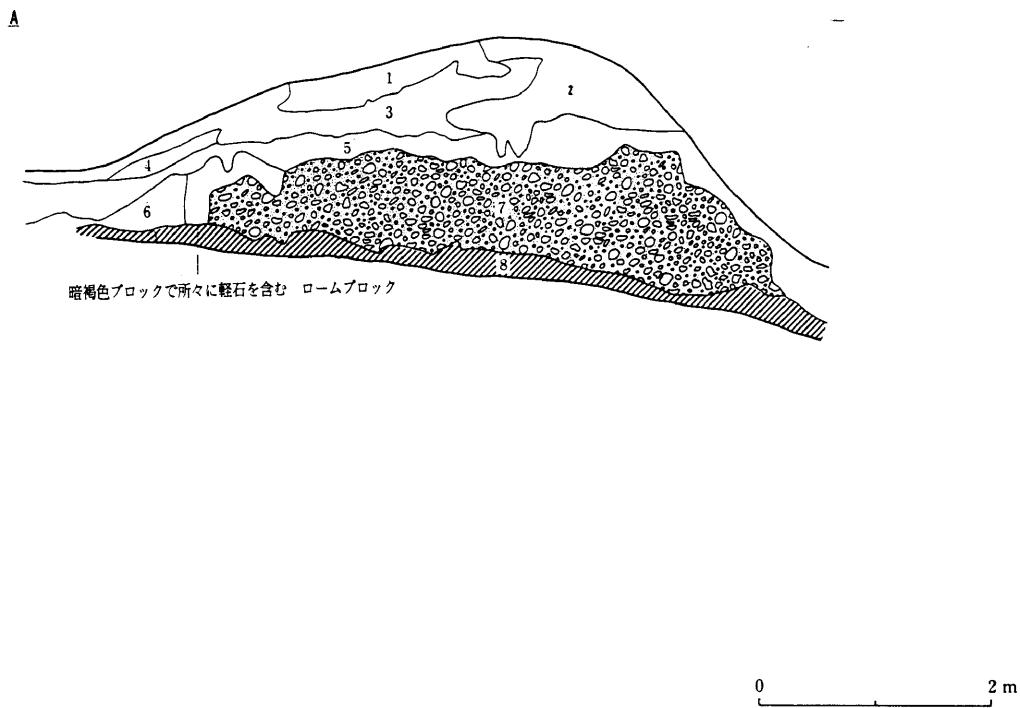


第18図 1区北東部長トレンチ断面図

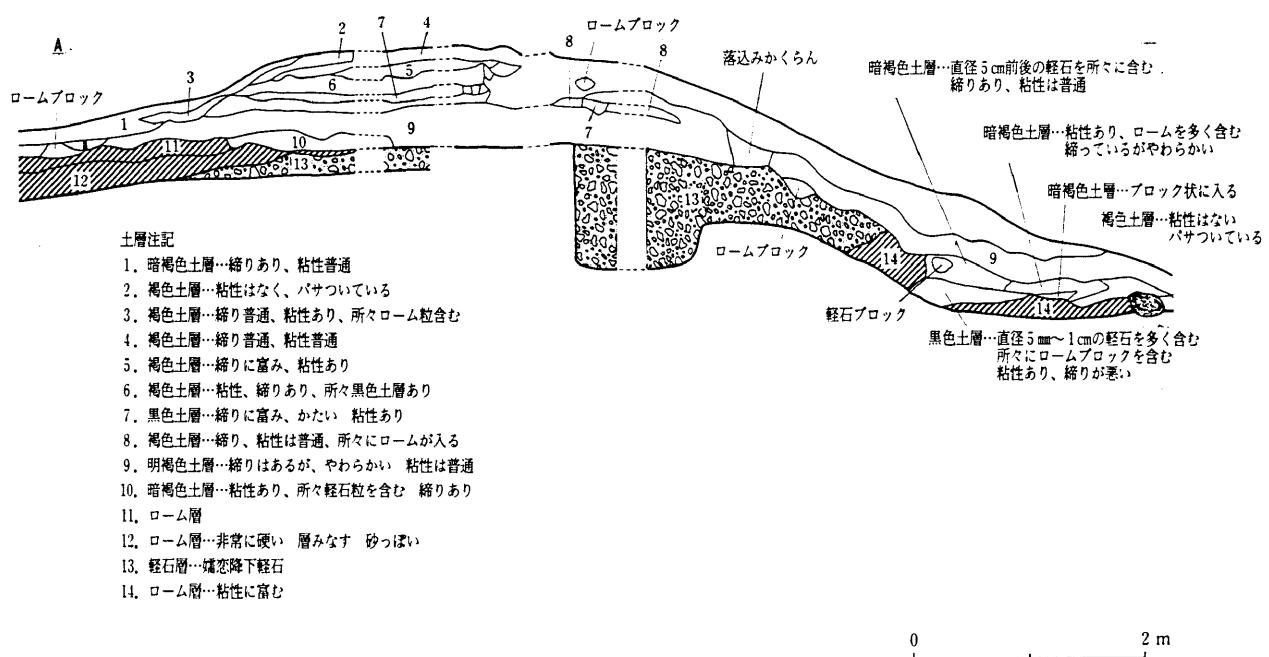


第19図 1区北西部長トレンチ断面図

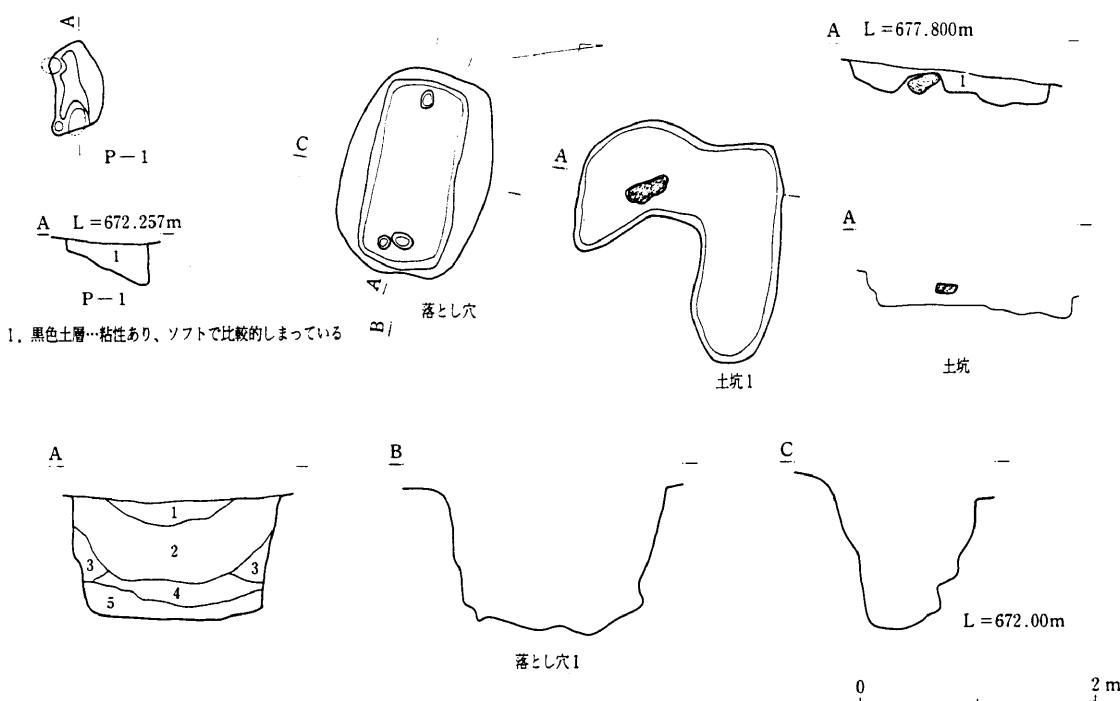




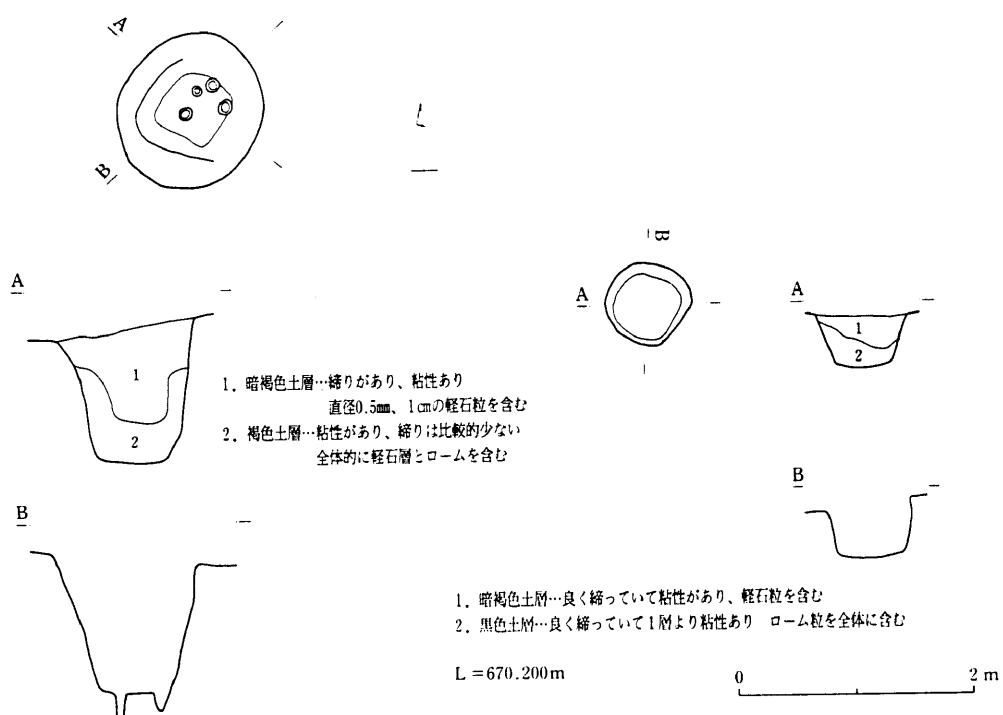
第20図 1区土居1(南)断面図



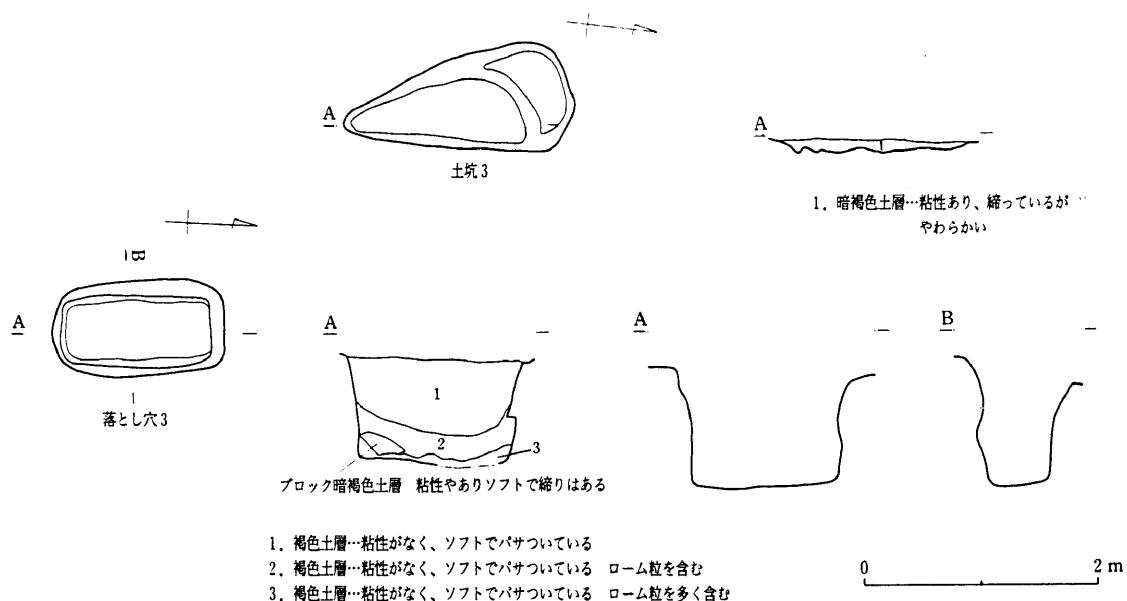
第21図 1区土居2断面図



第22図 2区P-1、落し穴1、土坑1、平面図、断面図



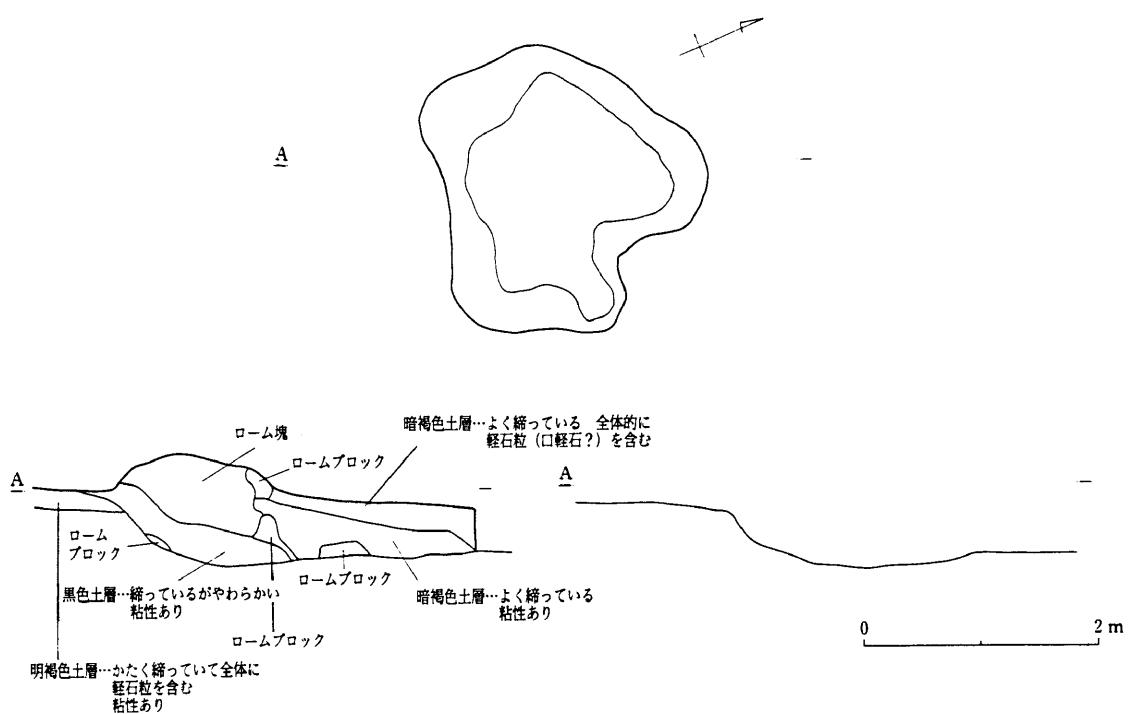
第23図 2区落し穴2、土坑2、平面図、断面図



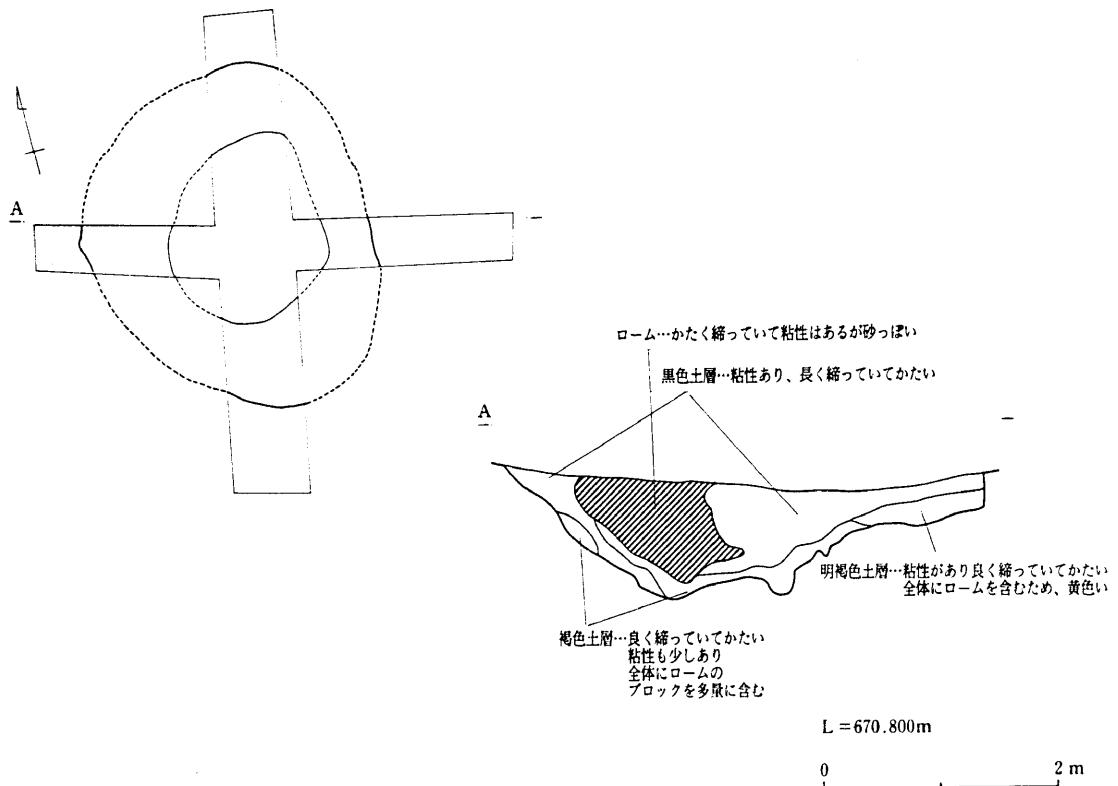
第24図 2区落し穴3、土坑3、平面図、断面図



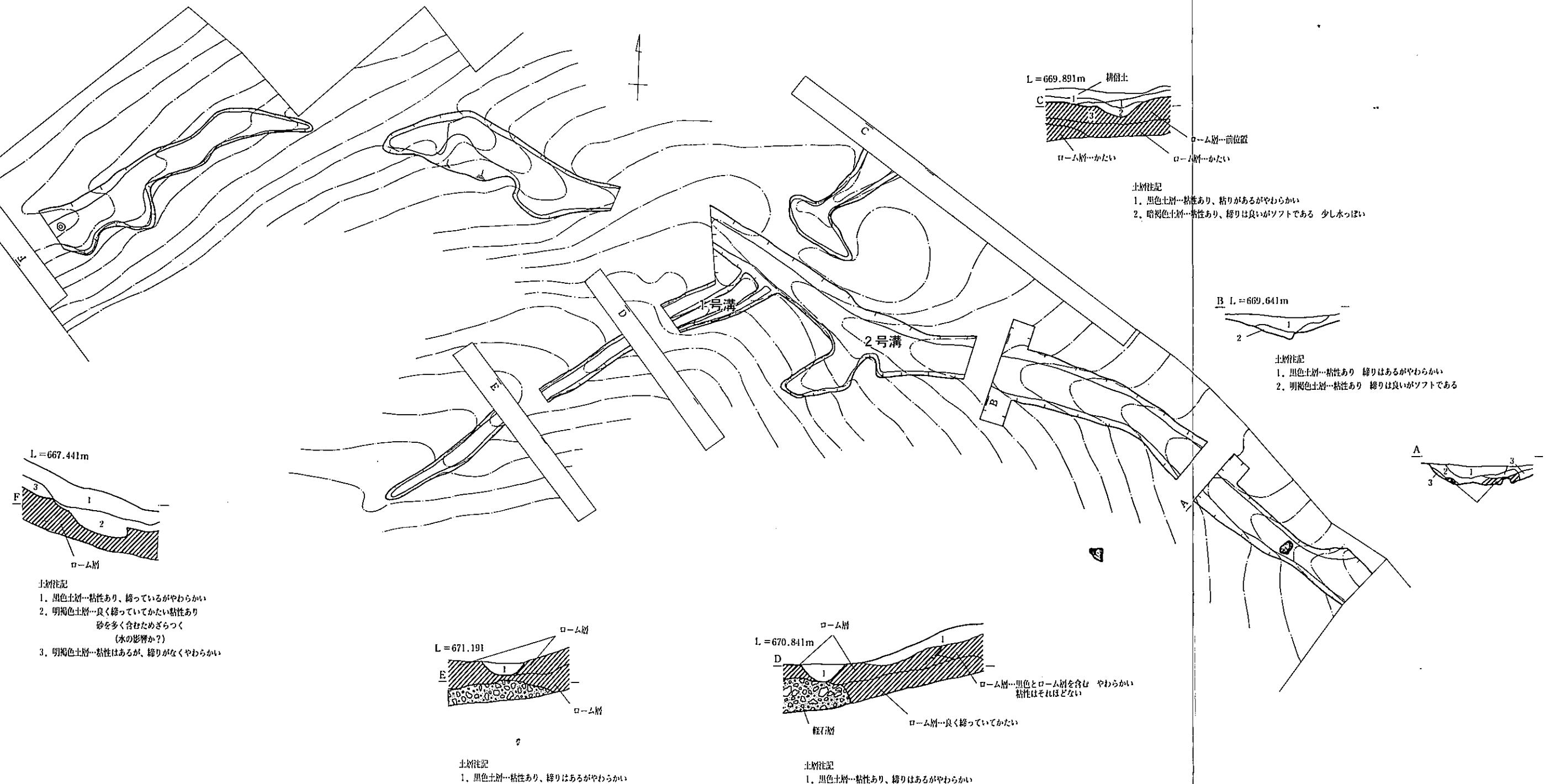
第25図 2区ピット(P-2～10)列平面図、断面図



第26図 2区特殊遺構1平面図、断面図



第27図 2区特殊遺構2平面図、断面図



第28図 2区溝平面図、断面図



# VI 出土遺物

## 1. 金属製遺物

発掘調査とその関連で得られた金属製品について観察結果を一表で、若干の考察的な内容を以降で触れたい。観察中の例言として、材質は例えば銅主体材であった場合、未精錬銅（山銅）や精錬銅（素銅）をはじめ、種々の合金銅が存在しているので、ここでは主体材の種類を記入したつもりである。鉄製品の鋳化状態での観察視点として、古代鉄様、和鉄様の3区分を行なった。古代鉄様は、鍛造組織の層状剥落が少なく、大まかなクラック状割れが目立つ個体を捉えた。この類は、古墳時代から平安時代の鉄製遺物であるが、我が国で熔解一製品化された個体と、半島・中国で熔解され製品化、もしくは鉄原料として我国内で製品化された個体との肉眼識別は困難と考えられること、さらには、応永年間を含む鎌倉時代までの（13・14世紀）鉄製品の出土例が少ないとによる鋳化状態の把握の不足などの問題点が残されてある。和鉄は、15世紀頃より国内各地で鉄山が活発化し、併せて鉄原料の量産が行なわれ、鍛造された鉄製遺物は層状剥落が目立つ。層状剥落が顕著な個体を和鉄と捉えた。洋鉄の識別は、西洋から輸入された鉄と意味あいではなく、幕末以来、高炉を用いる炉解技術が招来され、その高温度熔解の生地を用いたと考えられる表面部分で層状剥落はあるものの、その直下で小クラックが見られる個体を洋鉄と捉らえた。むろんこの識別法で区分できた訳ではなく、中間的な鋳化の個体もあり、ありのままを伝えたいつもりで記述した。続いて金属の品位を示唆する鋳色であるが、鉄製遺物の場合、硬度も示唆され、黒紫→茶紫→茶褐→茶の順で酸化の程度を捉えた。銅製遺物の場合は、使用時点での鋳色と、土中埋没し酸化した色調とは異なるのが一般的で、例えば銅と金との合金とされる赤銅は、使用時の表面鋳は黒～黒紫であるが、鋳化は緑青色を呈する。本稿は土中埋没した出土銅製遺物の表面色調を捉えた。硬度は、鉄製遺物について測定した。測定具はモースの硬度計で4度が蚩万、3度が方解万であるが、その中間の3.5前後を5円玉の真鍮（亜鉛の配合量により少し異なる）を用いた。おおむね鋼鉄～鉄～軟鉄の順である。以下に観察を行なう。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	観察内容	備考
第29図-1 図版1-1	鉄製 火箸か	1区礎石3	長28.4+茎小欠 調査時	下方に径1.2cmの責金具があり、以下に木質が遺存し、下方が茎と考えられ、横断面は方形。上方は横断面円～隅丸方形気味。鋳化は茶褐、古代～和鉄様。先端は丸みがあり、鉄質軟らか。	硬度3度強で軟らか。
第29図-2 図版1-2	鉄製 鏃	1区礎石3	長13.4 鏃先幅 0.9	有柄、尖根、小根。ケテ首は発達せず。茶褐。和鉄様。鉄質は鏃先部で硬い。鋳ぶくれ多く、良鉄に見えず。	硬度4度前後で硬い。
第29図-3 図版1-3	鉄製 釘	1区礎石3	長3.2。	頭部折り返し。横断面方形。鋳ぶくれ少ない。茶褐。和鉄様。先端は曲り、使用済みの釘。木質の残存なし。	硬度3.5度前後。
第29図-4 図版1-4	鉄製 釘	1区礎石3	長5.2+先小欠。	頭部折り返し。横断面方形。鋳ぶくれ少ない。茶褐。和鉄様。全体に少し曲りがあり、使用済釘。木質の残存なし。	硬度4度前後で硬い。
第29図-5 図版1-5	鉄製 不明	1区礎石3	長2.4+旧時 欠損。	両端部は旧時欠損。横断面方形。鋳ぶくれ少ない。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体に少し曲りがあり、機能停止後の曲り。	硬度3.5度以上、やや硬い。
第29図-6 図版1-6	鉄製 不明	1区礎石3	長4.3+旧時 欠損。	茎片のように見えるが、図中横断はたまたまの形で隅丸長方形に近い。鋳ぶくれ多い。茶褐。古代鉄～和鉄様。	硬度3.5度以上、やや硬い。
第29図-7 図版1-7	鉄製 小札板	1区礎石3	長6.4+欠損部。 幅2.1。	浅く反りあり。図上方の咸穴は不明確。咸穴は下方3穴が約3mm、上方2mm強。鋳ぶくれ少なく良鉄。和鉄様。茶褐。	硬度3.5前後。漆見えず。
第29図-8 図版1-8	鉄製 釘	1区礎石3	長2.9+欠損部。	頭部折り返し、横断面方形気味。鋳ぶくれ多い。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体に少し曲りがあり使用済釘。木質の残存なし	硬度3.5度弱。
第29図-9 図版1-9	鉄製 釘	1区礎石3	長4.2+欠損部	頭部折り返し、横断面方形気味。鋳ぶくれあり。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体に少し曲りがあり使用済釘。木質の残存なし	硬度3.5度弱。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	観察内 容	備 考
第29図-10 図版1-10	鉄製 釘か	1区礎石3	長4.2。	元太りの頭部。横断面方形気味。鋸ぶくれ少。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体に少し曲りがあり使用済みか。木質の残存なし。	硬度3.5度前後。
第29図-11 図版1-11	鉄製 鉄片	1区礎石3	長3.05	原料鉄片か。鋸ぶくれあり、古い時代に2枚に割れ、鋸化接着した個体か。銑より軟らかそうで密度高そう。	硬度3.5～4.0度。
第29図-12 図版1-12	鉄製 釘	1区礎石3	長4.3+欠損部。	頭部折り返しらしい。横断面方形気味。茶褐。和鉄様。全体に少し曲りがあり使用済釘。木質の残存なし。	硬度3.5度前後。
第29図-13 図版1-13	鉄製 釘	1区礎石3	長3.9。	頭部折り返し。横断面方形気味。茶褐。和鉄様。鋸割れあり。全体は直線的で未使用か、使用済か不明。木質の残存なし。	硬度3.5度弱。
第29図-14 図版1-14	鉄製 釘	1区礎石3 P-4グ	長4.2+欠損部	頭部は鋸化ふくれのため不明瞭。横断面方形気味。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体、直線的で未使用、使用済か不明。木質なし。	硬度3.5度前後。
第29図-15 図版1-15	鉄製 釘	1区礎石3 O-4グ	長4.2	頭部折り返し。横断面方形気味。茶褐。古代鉄～和鉄様。鋸ぶくれ多。少し曲り、使用済釘。木質の残存なし。	硬度3.5度前後。
第29図-16 図版1-16	鉄製 釘か	1区礎石3 O-4グ	長3.5+欠損部	頭部、先とも調査時欠。頭部は折り返しらしく釘か。茶褐。古代～和鉄様。全体、直線的で未使用、使用済か不明。木質なし。	硬度3.5度強。
第29図-17 図版1-17	鉄製 釘か	1区礎石3 N-3グ	長4.0。	頭部折り返し。横断面方形気味。茶褐。古代鉄～和鉄様。先端部が大きく曲り、使用済釘。木質の遺存なし。	硬度3.5度前後。
第29図-18 図版1-18	鉄製 釘か	1区礎石3 N-3グ	長4.25+欠損部。	頭部折り返し。横断面方形気味。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体、直線的で未使用か使用済か不明。木質なし。	硬度3.5度前後。
第29図-19 図版1-19	鉄製 不明	1区礎石3 Q-5グ	長3.25+旧欠損部	見える個所では、横断面円形気味。茶褐。古代鉄～和鉄様。全体的に鋸ぶくれ顕著で、製品名不明。	硬度3.5度弱。
第29図-20 図版1-20	鉄製 釘	1区 表採	長2.9+欠損部	頭部折り返し。横断面方形気味。暗茶。和鉄様。先端部は大きく曲り、使用済釘。木質なし。地金残存か。	硬度3.5度前後。
第29図-21 図版1-21	鉄製 釘	1区 表採	長1.95。	頭部大きく折り返される。横断面方形気味。暗茶。和鉄様。先端少し曲り、使用済釘らしい。木質なし。地金残存か。	硬度3.5度前後。
第29図-22 図版1-22	鉄滓	1区礎石3 N-3グ リット	長径7.2+2。短 径7.25。355g。	長径は復元すると9.7cmをなす。表面は凹凸大きく、裏面は炉底面旧状を思わせる。図化点措部は旧時の割れ口を示めし、平面は鉄滓表側。酸化の色調は茶味強く、裏の底面側につれ紫灰色味強くなる。残滓としては、やや重い。	
第29図-23 図版1-23	鉄製 輪金物	1区礎石3 P-4グ	直径22.8。	横断面は隅丸長方形か梢円形気味を成す。茶褐。和鉄様。使用目的は不明。輪としての鍛着部不明。	
第30図-1 図版2-1	銅主材 目貫	1区礎石3	長1.95+旧欠損部。	周縁木葉様の嬖、表に菱様の刻線あり。裏面に押出しの太整痕と中央に座様の痕跡あり。被熱のためか鋸色変化あり。	30図11と対か
第30図-2 図版2-2	銅主材 鍍金物	1区礎石3	長径3.1。	図平面方に足の欠損あり。武用・調度の金具で、表面に菊文が見られるが、金面かは不明。刻文か型かは不明。	
第30図-3 図版2-3	銅主材 覆輪	1区礎石3	長径推定約9.0。	2片と小片が存在。2片接合の大きさは太刀锷様の大きさ径で、锷覆輪か。鍍金見えず。一端は無理に折ったようである。	甲冑、武用・調度に覆輪は使用される。
第30図-4 図版2-4	銅主材 覆輪	1区礎石3	長12.3。	長い棒状であるものの、歪みがあり、もともと曲線的であったものを直にしたようである。前出3と、同級である。	
第30図-5 図版2-5	銅主材 眉庇か	1区礎石3	長22.8+小欠損	革芯の眉庇か(女子・小児か)、鉢金を思わせる。表面全面に大まかに魚々子を打ち、果実(桃か)と葉を繊細に刻文している。図下端は折り曲げ、鉢留をなす。表・裏には炭化物多く付着し、被熱を見わせる色の変化あり。	鉢金にしては薄過ぎる。
第30図-6 図版2-6	銅主材 覆輪か	1区礎石3	長3.1+欠損部。	このほか接合可能な破片1点に鉢留が残され、およそ、覆輪か。鍍金痕見えず。外面には被熱を思わせる色の変化あり。	
第30図-7 図版2-7	銅主材 飾金具	1区礎石3	長4.8+欠損部。	図平面右側に1条の浅い稜部があり、その裏面の位置にいく分の高まりが別金属付着に見える。端部の折り曲げは浅い。	
第30図-8 図版2-8	鉄芯銅 張不明	1区礎石3	長1.6+欠損部幅 1.05。	鉄芯銅張のように見える。中世における鉄芯銅張例は少ない。銅被せかもしれない。製品名は不明である。	
第30図-9 図版2-9	銅主材 鍍金物	1区礎石3	長径3.1。	熔融中途か片側に足状に突出物あり。環の根の球部には足が着く。引手は、やや細くなり、太い個所もあり旧態を失う。	
第30図-10 図版2-10	銅主材 飾金具	1区礎石3 P-4グ	長4.0+欠損部	2力所に鉢穴と鉢1が残存。平面右下と下方に折り曲げが行われている。表側に向かい凸状をなす。	

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	観察内容	備考
第30図-11 図版2-11	銅主材 目貫	1区礎石3 Q-4グ	長1.95+旧欠損部。	30図1目貫と対をなすと考えられ小施文法、押し出し打ち込みの鑿なども極めて近似。被熱のためか色調化あり。	
第30図-12 図版2-12	銅主材 不明	1区礎石3 Q-4グ	長1.9+欠損部。	側面観は浅い弧を成す。凸側に浅い帯状の高まりあり。鋳色は青色に近いため、素銅様。	
第30図-13 図版2-13	銅主材 鷦目	1区礎石3 P-5グ	長径1.7	平面は少し楕円気味。筒部に接着面あり。筒部外面に黒漆様の物質が付着。上方の平線は折り返えし。太刀鷦目にしては太過ぎ、胃の天辺の飾金物としては小径過ぎるのでは。	
第33図-9 図版4-9	羽口	1区礎石3	直徑指定11~12.0。送風孔指定1.5~2.0、73g	図化されていないが、羽口片が存在している。胎土は軽く、白色粒子多く、褐色粒子を少々まじえ粗質。スサ混入は不明瞭。先端には熔解した珪化物の付着。珪化物の色調は茶、黒紫、淡黄緑斑を各々呈する。割れ口の色調は送風孔から芯にかけ桃色で酸化気味。そのほか黃灰色で中性換気味。銅か鉄製品製作か。	
第33図-11 図版4-11	銅主材 錢	1区礎石3 本丸部分	径2.3。	「皇宋通寶」と判読される。鋳色は少し黒づむ。鋳出しへは良くな文字明瞭。	
第42図-1 図版9-1	銅主材 錢	2区B-31 グリット	径2.3。	「熙寧元寶」と判読される。厚さは薄く、鋳出しへの文字は不鮮明。	
第42図-2 図版9-2	銅主材 錢	2区E-31 グリット	径2.4。	「口宋通寶」と判読される。厚さは薄く、鋳出しへの文字は不鮮明。	
第41図-1 図版9-1	鉄製 斧	2区土坑3	長19.5。768g。	地方では斧(よき)ともいい、よきは小形で、手斧級が本義。柄穴は角張る倒卵状。刃先は蛤。鋳色茶味強く、表面には錆ぶくれ多い。和鉄様の層状の縞を鋳中に見る。	明治前期以前か。硬度4度弱。

## 2. 石製遺物

群馬県は、火山県でもあり、石材種の豊富な土地である。ここに砥石は、荒砥・中砥・合砥(仕上)を産し、中部地方以北の表日本沿いでは数少ない県である。石臼も、ち密で自重のある花崗岩(近世以降が主)、粗質で軽い粗粒安山岩(県内出現期の14世紀以来)の粗・密の両者が揃っている。遺跡では、砥石4点、石臼2点、小石2点、硯1点の出土がある。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	観察内容	備考
第33図-7 図版4-7	小石	1区礎石3 O-4グ	長2.0。	硬質、重く、光沢あり。黒色味強い。碁石もしくは、陰・陽石として占いなどに使用か。黒色は陰。	
第33図-8 図版4-8	小石	1区礎石3 O-4	長1.9。	硬質、重く、光沢あり。黒色味強い。碁石もしくは、陰・陽石として占いなどに使用か。黒色は陰。	
第33図-10 図版4-10	硯	小区礎石 N-3	長2.9。	石質は、○色。硬質。重い。側部に鋸挽目あり。周縁。側面平滑。表面に墨の砂磨痕はほどんど見えず。裏面剥落。	
第35図-1 図版6-1	石製 砥石	堀切1	長15.4。	使用面は左平面を主とし、右平面側は少、計2面。側部、小口、右平面の一部に猫搔様のならしの削りあり。質は流紋岩質で非結晶・結晶鉱物を含み、非砥石。中砥級。	中世以降、中砥級。
第39図-3 図版8-3	石製 砥石	1区確認	長17.0。	使用石は左平面を主に、左側部にほんのわずかあり、計2面。両側部には削り目、裏面に長大な削り目あり。小口は小出しの面か。被熱のためか全体に黒づむ。表面の砂磨消耗は刃付砥。削目は刃こぼれ条痕がわずかあり。質は流紋岩質で結晶鉱物目立らず、非結晶鉱物は軟らかそう。中砥級。	中砥級
第39図-4 図版4-4	石製 砥石	1区確認	長4.9。幅3.7。	裏面と手前小口を欠損し、その欠損は新しそう。使用は、左平面のみで、両側部は削整形面。奥小口の一部にも同様の削整形面が残る。質はデイサイト様で、重く、少し硬そう。結晶鉱物目立らず。使用面は合わせたらしく平滑で、この砥石が逆に今世のならしを行う砥石であったかもしれない。使用の中央が墨痕のように黒づむが焼された感もある。中砥～粗程度の仕上砥。	中砥～粗程度の仕上砥。合砥か。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	観察内容	備考
第39図-5 図版4-5	石製 砥石	1区確認	長11.1。幅2.5。	主使用は図左側平面のみ。小口、側部とも削り整形面が残る。使用面は、両小口側に向い薄くなり、刃付砥としても機能。質は、結晶鉱物の見えないくらいの目のつみで、やや硬く、粗仕上げ程度が可能。デイサイト質。整形工具は幅広で2.2cm以上ある。手持砥の大きさであるが利き癖は少ない。また前出4と同級質であるが合せは弱い。	中砥～粗程度の 仕上砥。
第37図-1 図版7-1	石製 穀臼 上臼	1区堀切2	径28.4。	石質は、やや粗質、やや軽い。表面には周縁帶、物くばりの孔があり、浅いがのみ状の整形痕が残る。裏面には、6分割左回転の目溝が6～7条を一単位として刻まれる。中央には軸穴があり、上面まで完通していない。側部には挽手穴が2穴もうけられ、そのうち1つは擦り合わせ面に達する。2穴が本来か、1穴使欠損のため追加したかは不明。	
第38図-1 図版7-1	石製 穀臼 下臼	1区礎石2	径29.4。ふくみ幅 3.6。	石質は、やや粗質、やや軽い。表面には6分割左回転の目溝が8～9条を一単位として刻まれる。回転消耗は前出ほどではない。ふくみは3.6cmと大きい。中央には軸穴が裏面まで完通している。裏面はのみの整形痕が荒削りの状態で見られる。	

### 3. 焼物

出土の焼き物の種は、中国製白磁・青白磁。染付磁器、国産の瀬戸・美濃施釉陶器、常滑焼締陶器、裏日本製須恵器系陶器、地方性軟質陶器がある。内陸部奥端の位置の中での中世の焼物のあり方の一端が知れるのと同時に、吾妻郡地域で不明確だった中世の交易状況が示されることの存在意義は深い。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・色調・焼成	摘要	備考
第31図-1 図版3-1	焼締陶器、 甕	1区礎石3			まとめと考察参照。	
第31図-2 図版3-2	須恵糸、陶器、甕	1区礎石3			まとめと考察参照。	
第33図-3 図版4-3	灰釉陶器 3耳壺	1区礎石3	高22.9。 幅18.3。	胎土密で夾雜物微。灰色。焼き締り。	外面に3耳附着。耳中には3条の凹みと4条の横の隆条あり。耳部は完通せず釉がつまる。胴上半に1条と2条の沈線あり。口縁部の内外と高台の内外、底面に灰釉刷毛塗りの刷毛目あり。釉の少ない箇所は酸化気味。釉は暗淡緑を呈し、厚く安定している。内面に輪轂目あり。内面の上半に釉掛時に流れた稿あり。外面上半は輪轂右回転ヘラ削。	14世紀前半頃。 瀬戸。被熱した ようである。使 用擦痕微弱で頻 度浅い。
第33図-4 図版4-4	青白磁 梅瓶	1区礎石3	高推定26.5前後。 幅推定18.5前後。	胎土密で夾雜物なし。 灰色。焼き締り。	上半と下半は接合できず。外面に櫛搔流れ文あり。内面輪轂左回転の輪轂目あり。体部外側下方から底にかけ無釉。釉は淡青白の青白磁釉で厚く施釉。釉表面は発泡した箇所があり被熱あり。	12世紀頃。中国 景德鎮。器面に は擦痕や小さな ハゼの釉はがれ あり使用頻度大。
第33図-5 図版4-5	施釉陶皿	1区礎石3	口径11.4。	胎土粗で夾雜物微。黄 灰色。焼き締り。	口縁部は端返りとなる。内外面に透明感 の強い光沢のある釉あり。内面底は釉溜 となる。釉に細貫入あり。作調丁寧。	16世紀頃。美 濃。使用傷少 あり、頻度少。
第34図-1 図版6-1	施釉陶皿	1区土坑1	口径11.3。	胎土粗で夾雜物微。灰 色。焼き締り。	内面に浅い段あり。外面下方から底面に かけ露胎となり、底面にヘラ記号あり、焼成前か後か不明瞭。釉は透明感 強く、内面底は溜る。内面底に目跡あり。 外面下方は輪轂右回転のヘラ削目あり。	16世紀前半頃。 美濃。使用傷あ り、頻度や高い。
第34図-2 図版6-2	白磁 皿	1区土坑1	高台端径16.0。	胎土密で夾雜物なし。 白色。焼き締り。	内面にヘラ書～針書様工具による唐草文 あり。高台端部を除き淡淡青白色の白磁 釉。高台端部の削り目は生掛を示唆。釉 表面は小発泡し、被熱少しあり。施釉は やや薄い。	15世紀後半～16 世紀。中国。使 用傷微、頻度 微。被熱軽くあ り。

図 番 号 写 真 番 号	種 器 形	出 土 位 置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・色 調・焼 成	摘 要	備 考
第36図-1 図版6-1	軟質陶 内耳壙	1区R-4 グリット	口径31.2	胎土並で白・黒色鉱物 多く含む。内外面少し 燻かり、外面被熱色 変、焼成は酸化気味。 橙～暗橙色。	内面に1対の内耳あり。口縁端部は平ら で丁寧。底部は欠損するが下端部より至 近の位置。内面の稜部で蓋受は難。外面 整形は指などの圧痕と撫。口縁部周辺の 内外は輪轂右回転の撫。	15・16世紀。地 方製。被熱は煮 飯時か。
第39図-1 図版8-1	施釉陶 皿	1区確認	口径推定18.0	胎土粗で夾雜物微。黄 灰色。焼き締り。	類似破片22点、2個体以上の印花黃文皿 あり。釉は淡暗緑色を呈し、ほぼ全面施 釉。	16世紀。美濃。 使用微、頻度微。
第39図-2 図版8-2	染付磁器 碗	1区確認	口径13.4。	胎土密で夾雜物なし。 白色。焼き締まり。	外面に濃い青色の雷文・草文、内面に圈 線を染付。発色は良くない。器肉薄い。	16世紀。中国南 部か。使用傷 微、頻度微。

## ◎まとめと考察

遺物類は、1. 金属製遺物、2. 石製遺物、3. 焼物の3種に分け観察し、以下にその所感をまとめたい。

金属製遺物のうち判明した種は、鎌、目貫、小札などの武具と、銅主材の甲冑部材を思わせる武用金工（刀装具などから武家調度金具類を含めて製作するという意味、実態は地方における金工師の地位や職分をいに果すかは主従関係のあり様で異なる。）遺物、櫃や箱物など調度に関連したと考えられる4.5cm以下の再利用が意味された小形の鉄釘類などがあり、さられ再利用、精錬の左証となる椀形の鉄滓、羽口が存在していた。それらは遺物全体から古代の混在様相は薄く、中世のある時期に共通の因果により存在したと考えられた。この後、近世以降において鉄製斧など少数が存在する。出土遺物の大多数を占める1区礎石3遺物集中個所中の焼物類の下限時期は16世紀後半にあるため、金属製遺物類の時期特定についてもほぼ同様と推定される。

金属製品を仔細に見ると熔解中途を思わせる銅製品があり、一方では火事による被熱痕が陶・磁器に見られ、その残材集積個所が1区礎石3の遺物集中であったことも考えられるが、鉄滓、羽口、使用済釘の集積、武用の金属製品の集合があることにより、火事が起ころうと、無からうと武用に伴う金属製品の製作、修理等が、城跡の最高所（削平坦部の上から2段目）の約25m×27mの削平坦部の南西隅で行われていたと推考される。ここでいう武用の修理とは、刀の柄巻、甲冑の威組紐の製作など武士と家族・所従らで膳える範囲でなく、それ以上の工業的な工作である。中世の金工・鍛冶関連の県下の現況は、200ヶ所を越える中世遺跡・遺構の調査例がありながら、甘楽地域で遺構を伴なう側があるほか実例は乏しく、また伝承や伝存資料の製作地は、庄の中心域や、地域の筆頭勢力の拠点、交通上の要衝の地であり、この遺跡における工房の存在は、経済的背景を無くしては考え難く、当遺跡そのものか周間に、西吾妻の筆頭 および拠点的な場所であったことを推定しておきたい。

金属製品の出土量の多さは、県下平野部において、まず考え難い量である。このことは、かつて触れた（大江・木津博明「中世金物推考」『高崎市史研究第3号』1993）ように15・16世紀には鉄材払底の時代がある。1区礎石3遺物集中の量は払底に反する状況であり、裏日本側の中世遺構の豊富さに通ずる量がある。そのことを裏日本側と同等に考えれば鉄材料入手が用意であったのかもしれない。蛇足ながら、越後上杉氏は、本拠春日山城周辺に、刀工・甲冑師らを国内・外から求め、居住させ、その影響地域においても系列工人を配していたのに對し、甲州武田氏は、自らの拠点地域での量産ではなく、影響地域下在住の刀工らに扶持を給し、武士団の一員とした点にも政策差が現われ、当遺跡の場合は、至近に工人を配する上杉氏の価値觀を思わせる。ちなみに倉渕村（現群馬郡）に住した権田政重は、武田氏から扶持を給されていたという近世史料が残されている。

2. 石製遺物は、砥石と石臼について見る。砥石は、平野部における中砥級に流紋岩を主体に、デイサイトも使用する点は共通するもの、2点に見るしっかりとした長大な削り整形は、類例に実感薄く、この吾妻西部での特色かもしれない。

金属工房の推定に関連しては、1区礎石3遺物集中から砥石は発見されていないようであることと、精仕上砥は、篩い掛を要するほどの木葉砥（極小砥石）まで用いられるので発見されていない可能性もある。また喜田院職人絵図（埼玉県）などでは初老の人物が縁で鍔らしきものを片手に盤縁<sup>たらいへり</sup>で磨いている場面になどから想像すれば、水場に近い場所などで分業の可能性も考慮する必要がある。精仕上げに最も近い個体は第39図4について合砥（砥いだ滓を砥クソと言い、砥クソにより砥石の研磨面と研がれる研磨の主体との間で密着性、潤滑性、研磨力増強性が得られる。二つの砥石を用い、研磨を行う前に合せて研ぎ砥クソを出しておく）らしい平面、平滑性があり、中砥の段階から、ち密さが要求されたことの左証であり、金工、鍛冶作業に関連しているかもしれないが墨痕らしき黒づみが中央に見られ、硯の表面研に用いられたものかもしれない。

石臼は径30cm以下の上臼・下臼とがあり、志田登「石臼」『新編高崎市史資料編3－中世1』1996による径30cmの中世臼の集中径より、いく分小さい特色がある。この点は、石の密度が平野部の粗粒安山岩より、さらに重いことに起因するのか否か、今後、この地域での資料増加が教えてくれると期待したい。

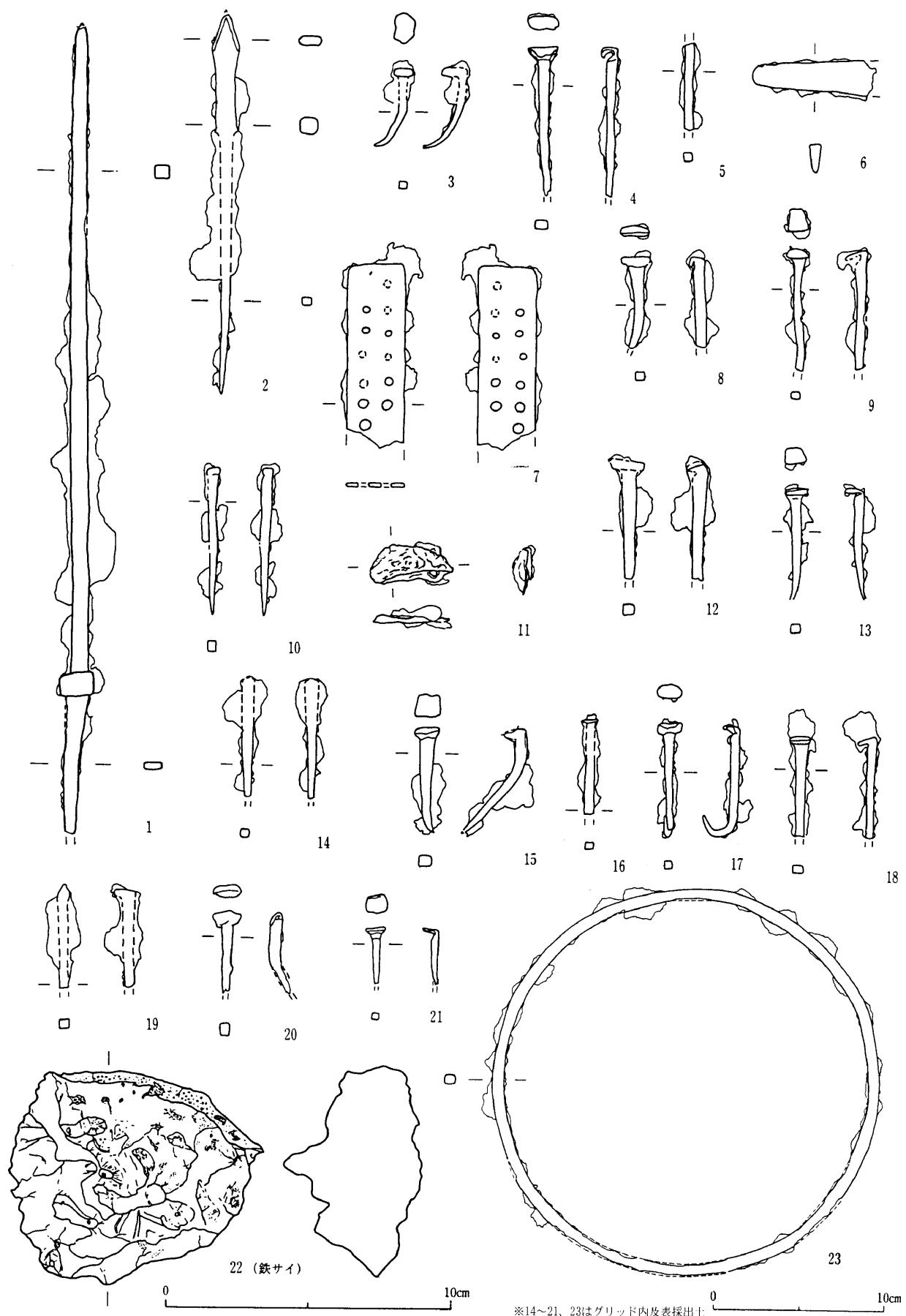
3. 焼物についてはまず第36図1の軟質陶器製内耳壙は、15・16世紀の平野部形態は吾妻郡中之条盆地に達しているにも関わらず碓氷郡松井町暮井遺跡（『仁田・暮井遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990出土内耳壙に、直線的な体部、耳部の断面形が太く丸いことなど共通性があり、また長野県内北信地域とも共通性のある形状のため、今後、資料増加に期待したい。

時代性に関し1区礎石3の遺物集中の個体を見ると下限は第31図1の常滑系甕の16世紀後半頃であり、同図2の中世須恵器系甕の13世紀末から14世紀初頭頃の個体や、第33図3の瀬戸3耳壺の14世紀前半頃、同図4の景德鎮青白磁梅瓶の12世紀頃といずれも大きな製作年代差がある。朝鮮半島済州島沖で日本に向って沈んだという14世紀の元船には前代の器物が多く、積載されており、古器愛玩の風は古くからあったようであるが、それを今回、改めて実感することとなった。しかし古器あえて求めての一括性か、使用者は関心があったものの結果的に多次元揃いになったのかという点に関して云えば、手入れや、水洗い時（ササラや灰などが使用される）の察痕の様子から第33図3の灰釉3耳壺は極めて少なく、特別の入手であったのと使用目的も別格であったのかもしれないが、他の個体は、時代相応の擦痕があり、特に同図4の青白磁梅瓶は顕著であることなどから、結果的に集合された伝存個体の揃いであったと推定したい。

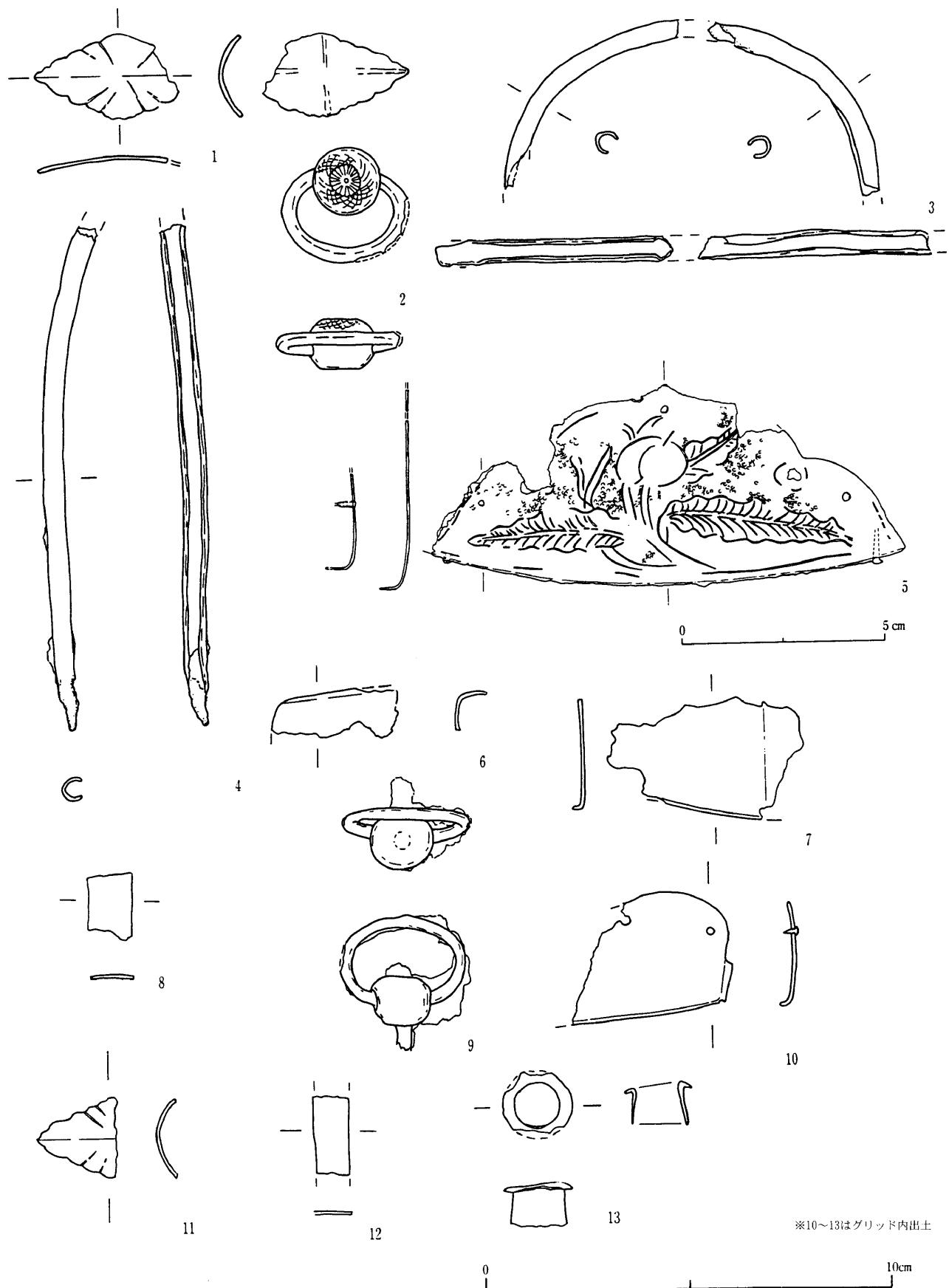
使用者像は、先の金工・鍛冶工房の人々が日常的に用いたとするには、品揃えに幅があり過ぎるので、城主関連の資料であると推定しておきたい。その教養度や知性に通ずるのかもしれない個体に第39図2がある。

舶載磁気中最も新しい16世紀後半の個体である。呉須手とよばれる類で、県内では月夜野町小川城址（相京建史『小川城址』（財）群馬埋蔵文化財調査事業団）1985）の南京赤絵手碗とともに更例の少ない個体で、使用者に招来物についての意識が強かったことを感じさせ、第34図2の明代白磁皿についても稀少である。このほか国産の陶器類を含めて考えれば、16世紀代に向かい個体量は増加するものの擦痕の状況から、過去の時代から陶磁器の收集は始まっており、そのことは長期にわたり財力の保持と、器物が欲しいという願望の維持がなされなければならない。使用者の一系譜は名跡であり、さらに金属製遺物から出された西吾妻地域の筆頭者の存在と併せ、この遺跡か周辺に拠点があったことを推定したい。

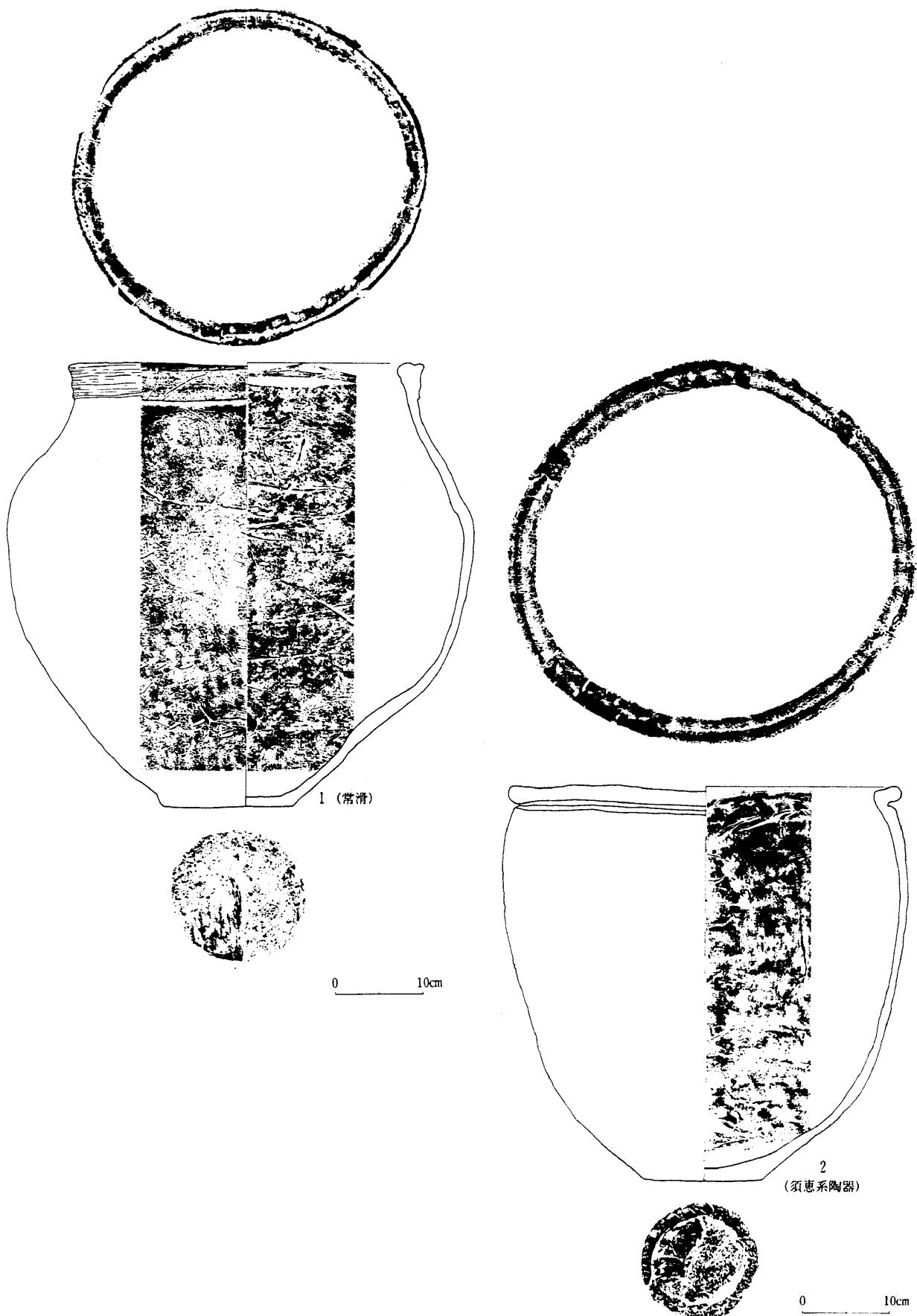
尚、出土炭化物については、図版5-1はアズキ、図版5-2は不明、図版5-3はアワカとおもわれるが、今後、分析していきたい。



第29図 1区基礎石3出土鉄製品



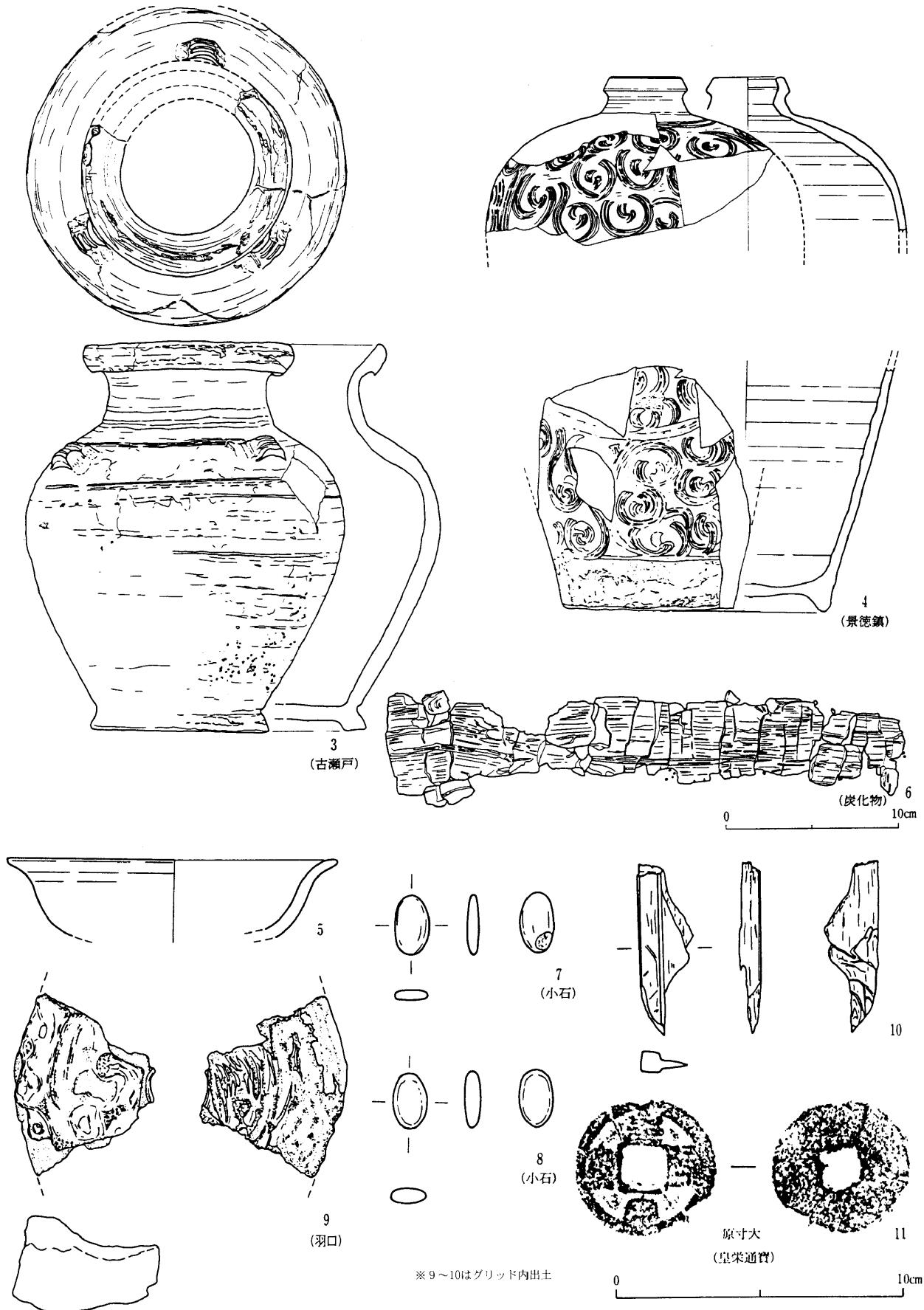
第30図 1区礎石3出土青銅製品



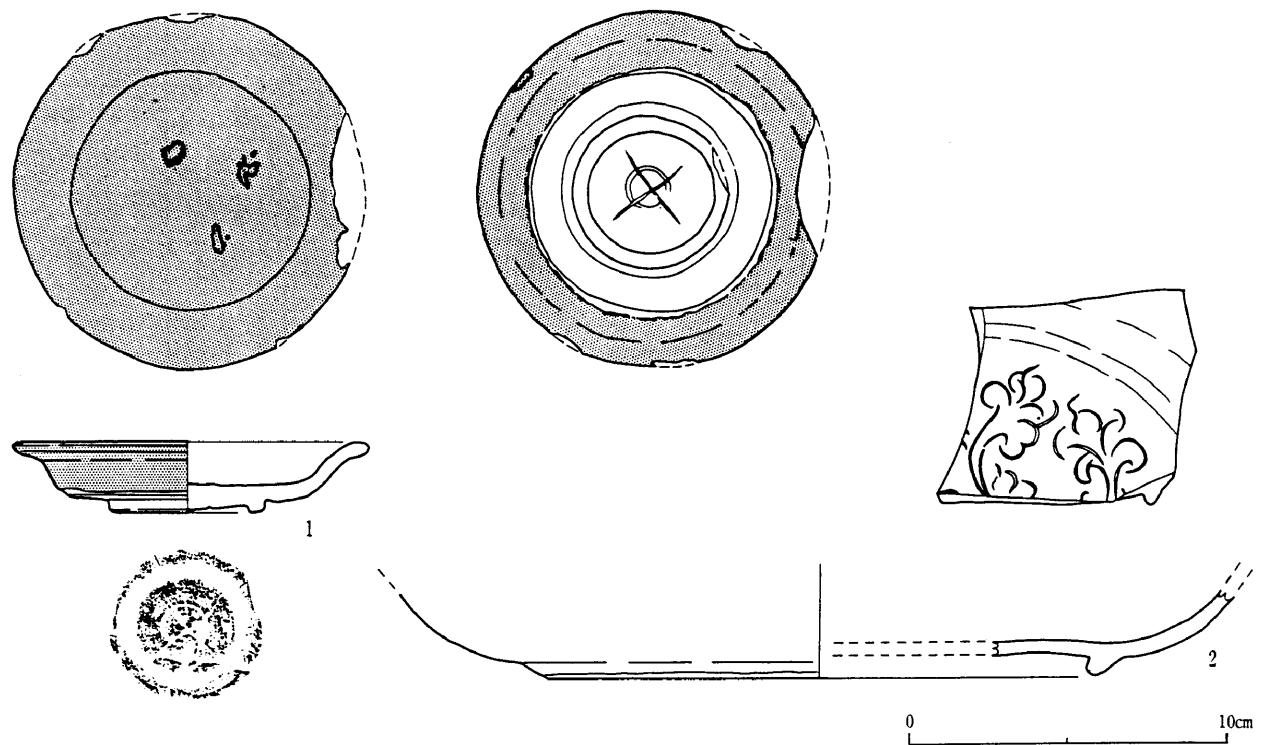
第31図 1区礎石3出土遺物(1)

第32図 1 区燧石 3 出土遺物(1) 2 の拓本

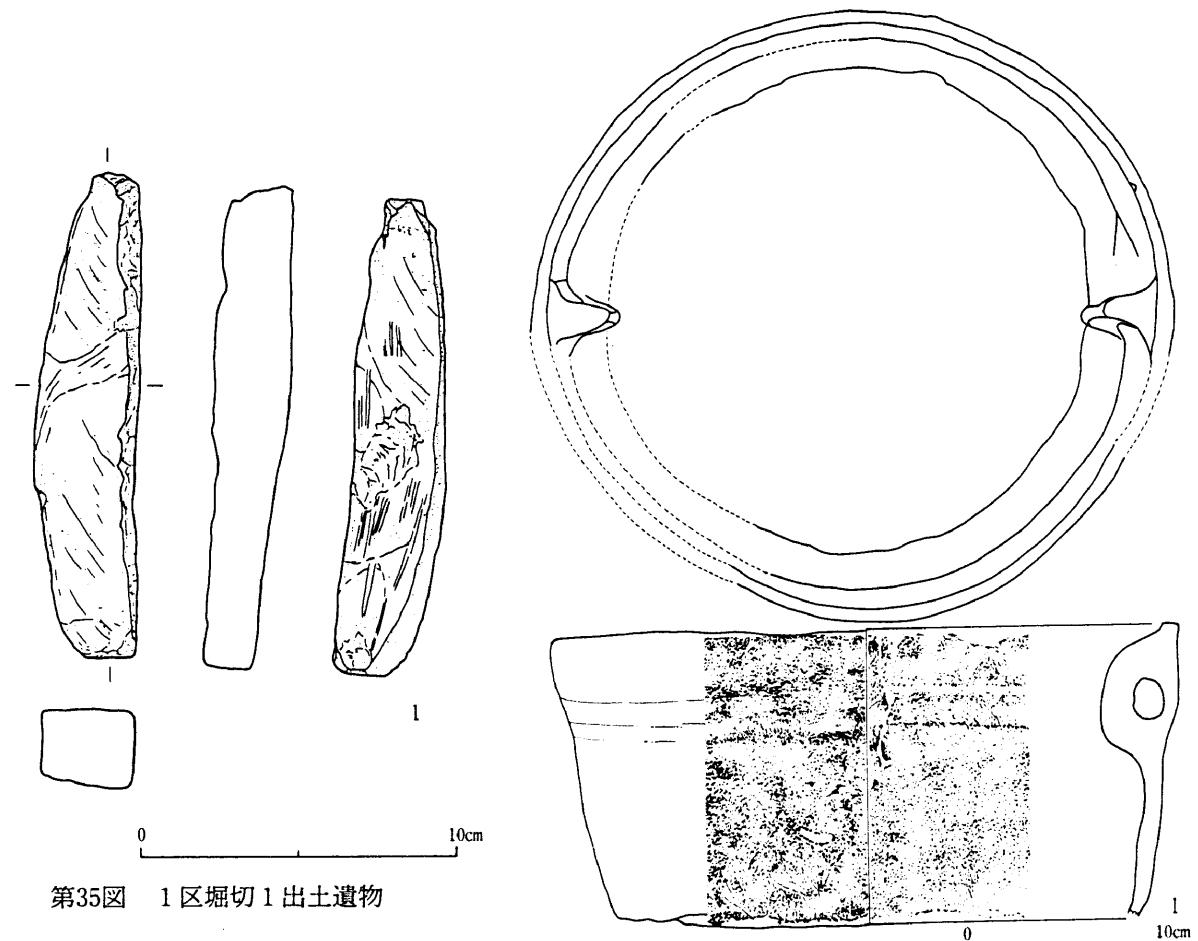




第33図 1区基礎 3出土遺物(2)

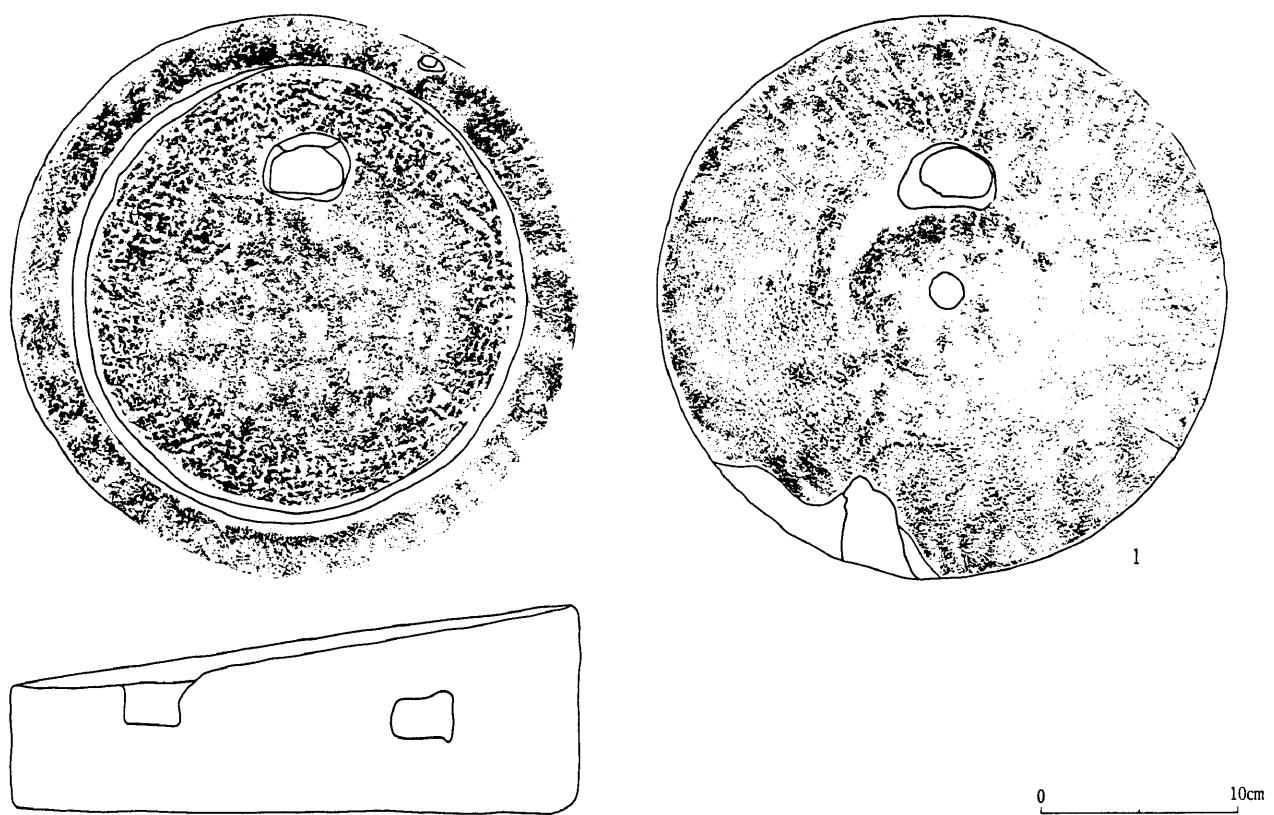


第34図 1区土坑1出土遺物

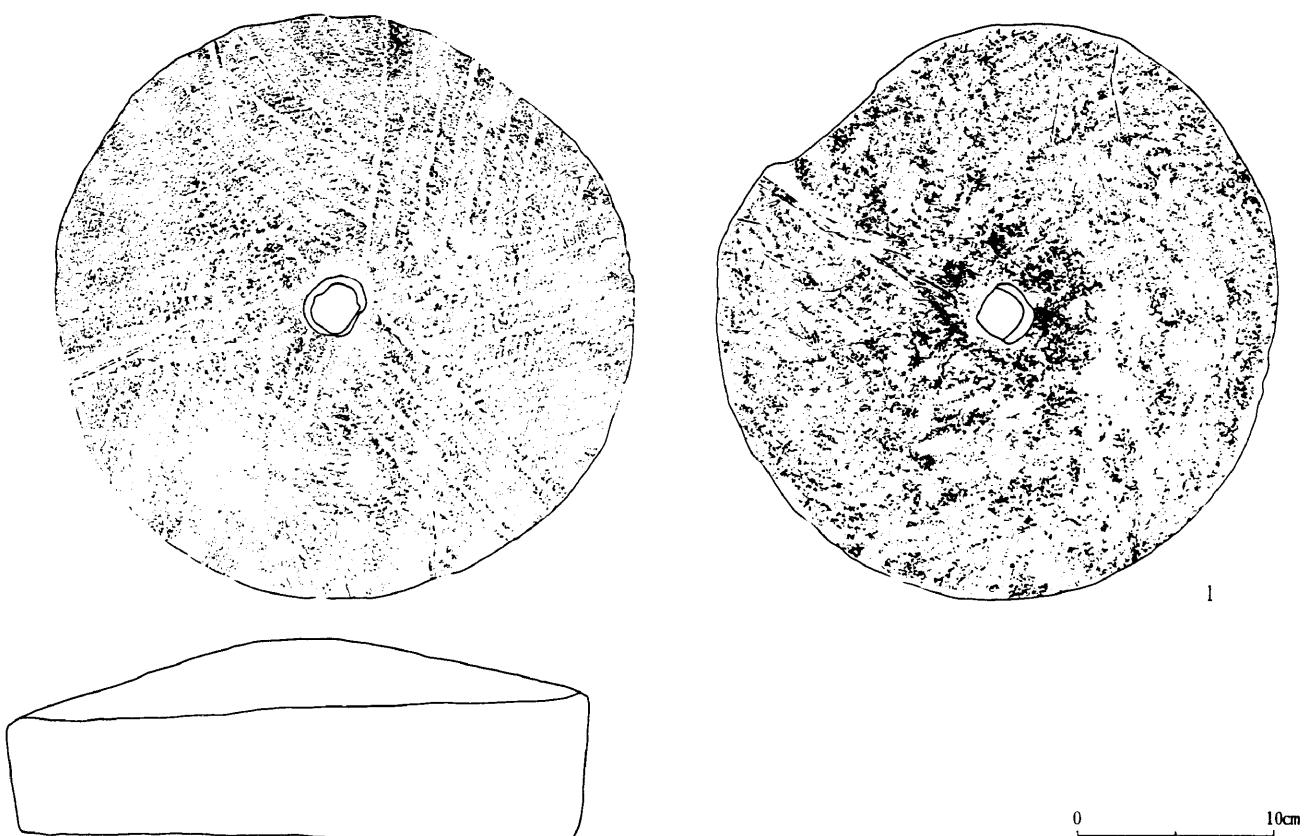


第35図 1区堀切1出土遺物

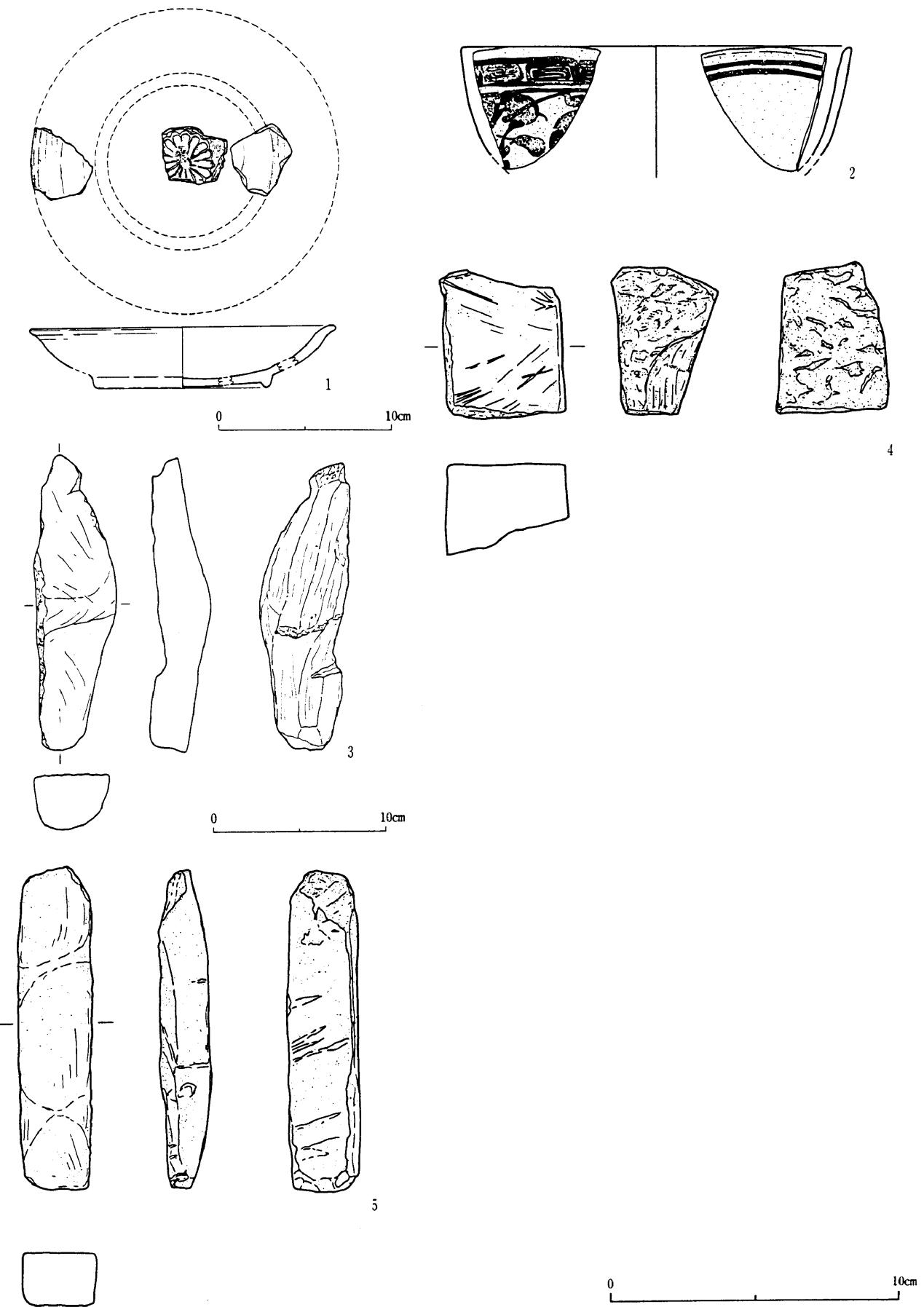
第36図 1区R-4グリット出土遺物



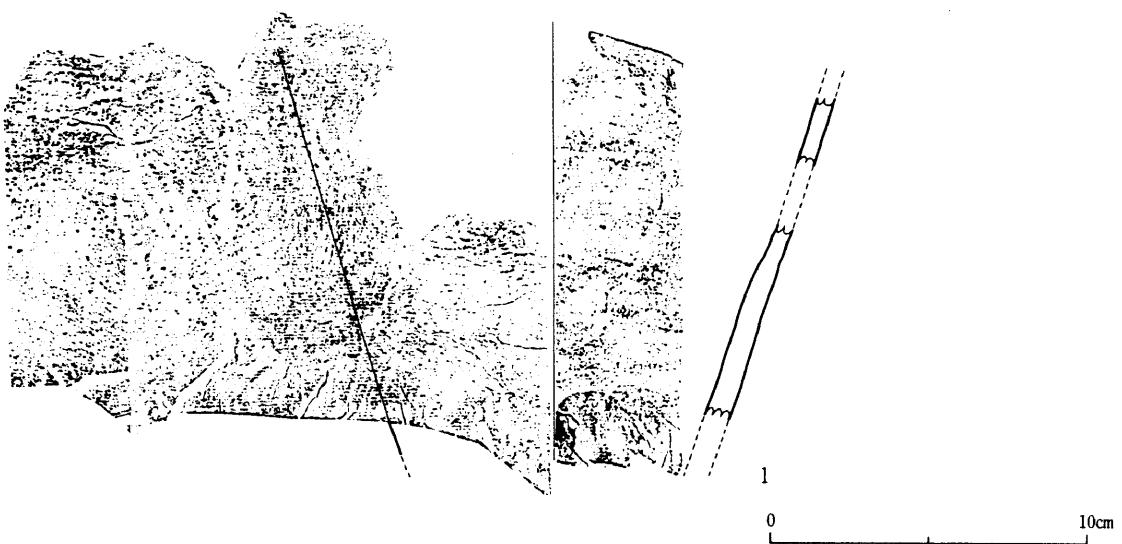
第37図 1区堀切2出土遺物



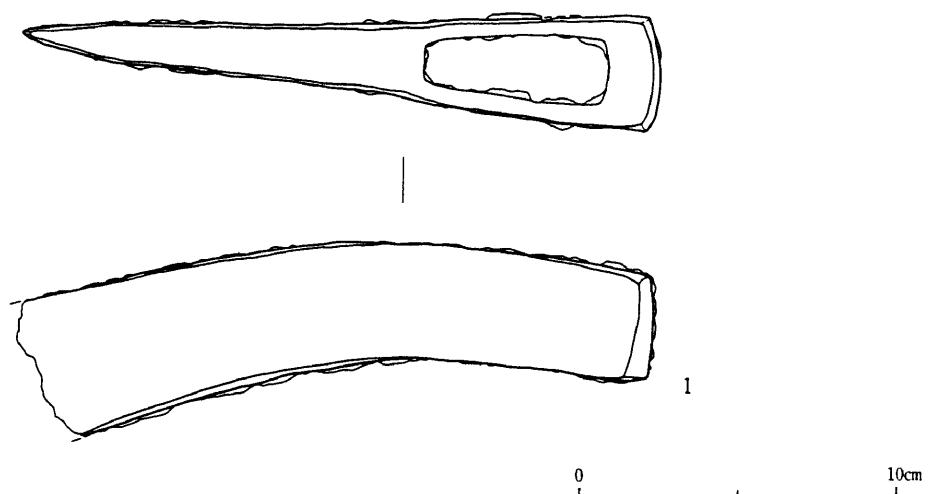
第38図 1区礎石2出土遺物



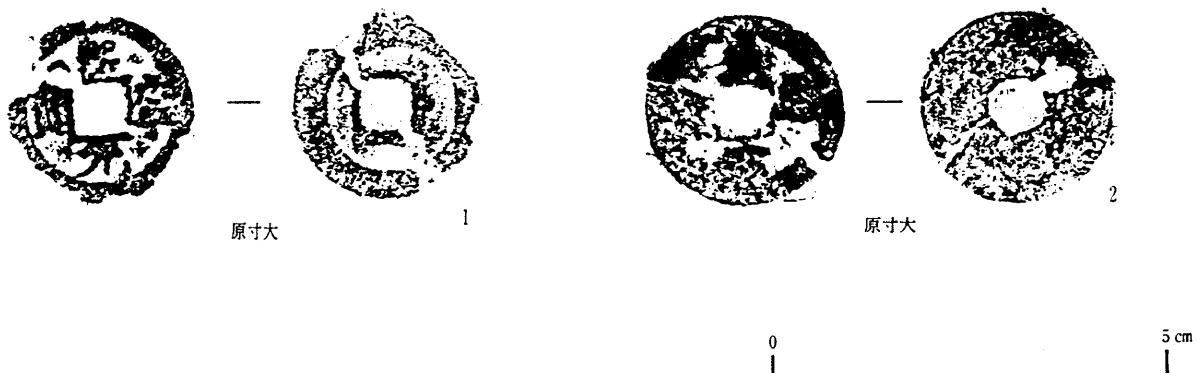
第39図 1区確認出土遺物(1)



第40図 2区落し穴2出土遺物



第41図 2区土坑3出土遺物



第42図 2区出土古銭拓本



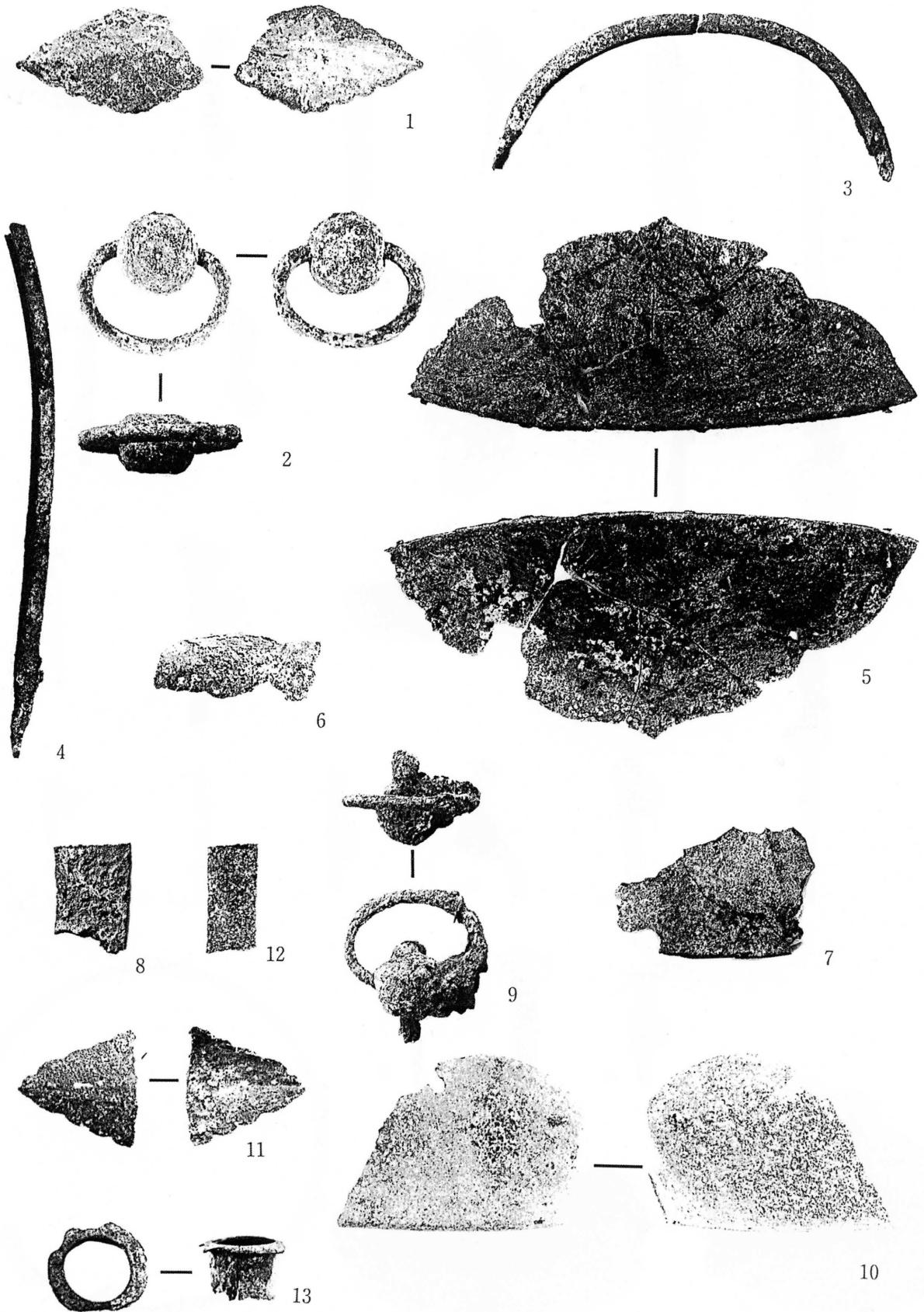
# 写 真 図 版





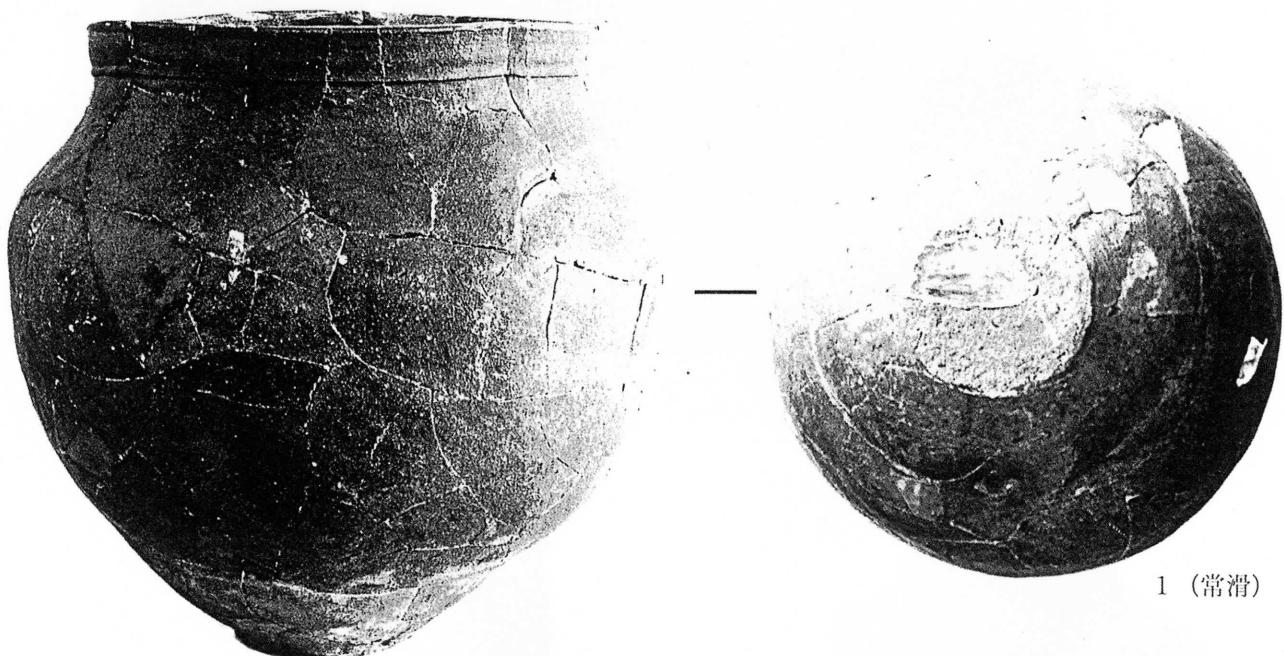
※14~21、23はグリッド内及表採出土

## 図版2

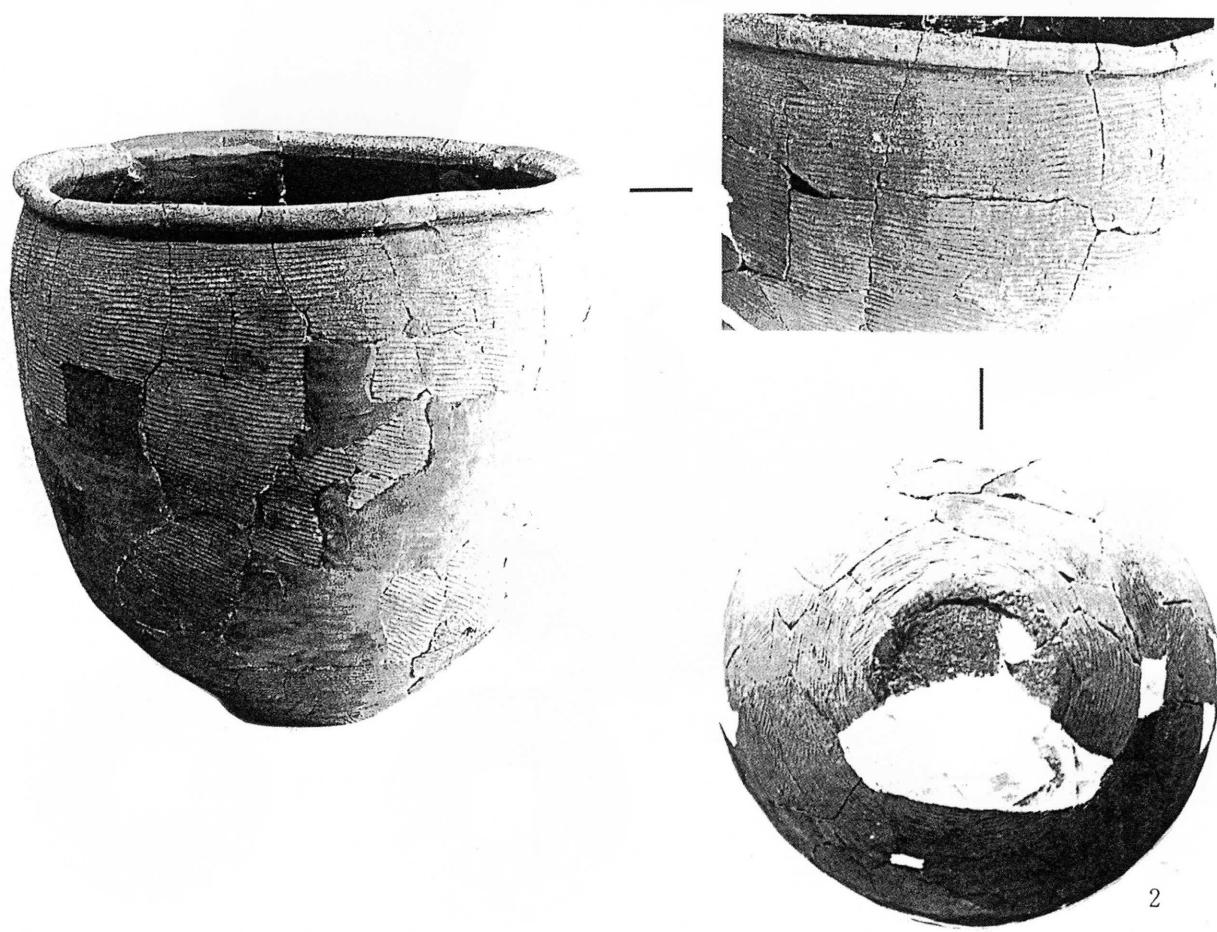


※10～13はグリッド内出土

1区礎石3出土青銅製品



1 (常滑)

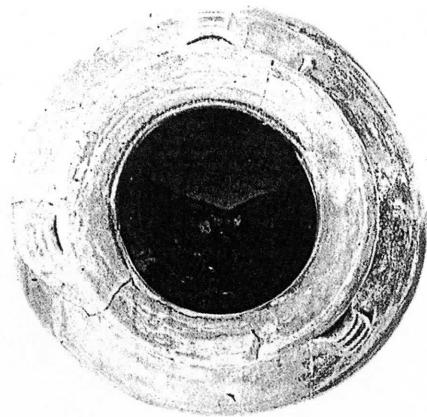


2

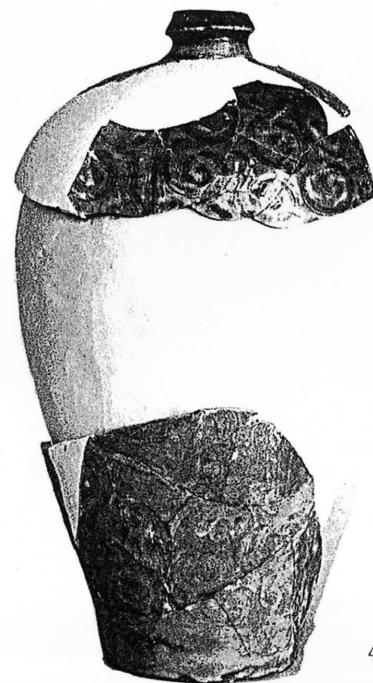
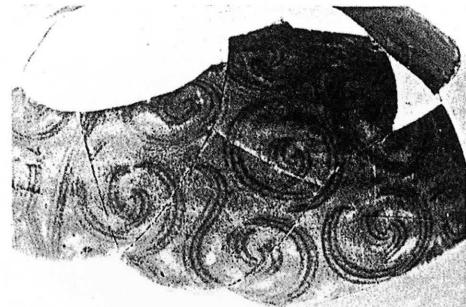
(須恵系陶器)

1 区礎石 3 出土遺物(1)

図版4



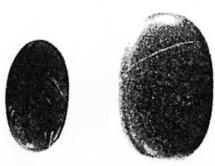
3 (古瀬戸)



4 (景德鎮)



5



7



8



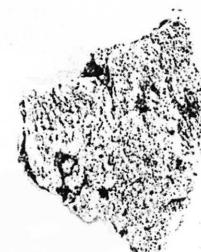
6



10



—

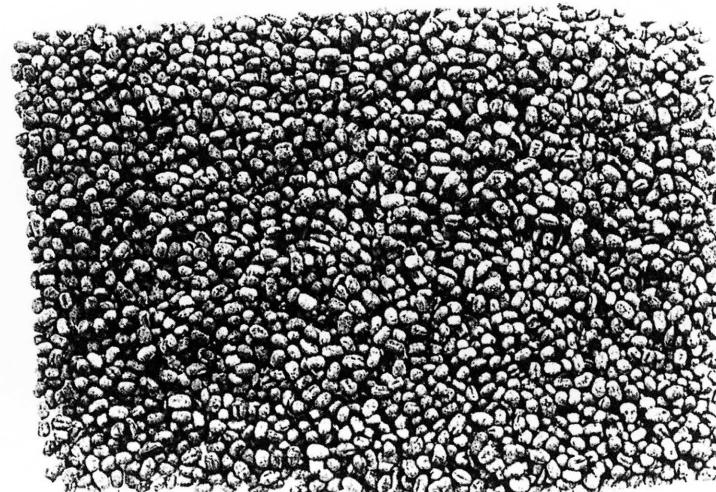


9 (羽口)



(皇宋通寶) 11

※9、10はグリッド内出土



1



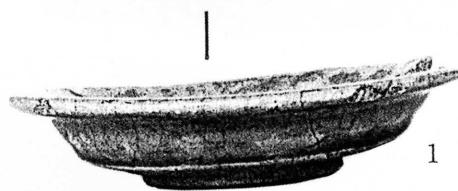
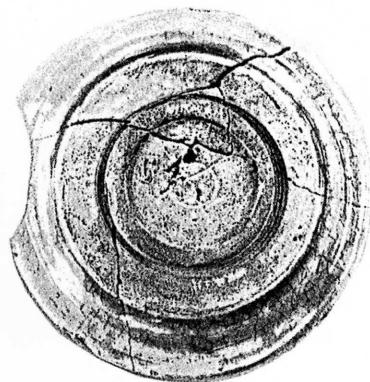
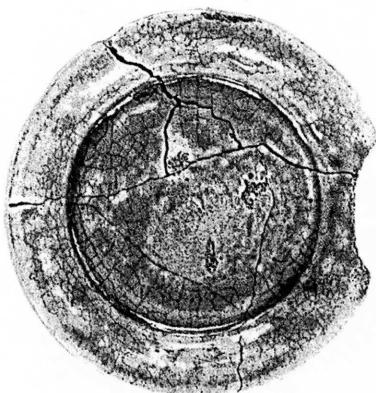
2



3

1 区礎石 3 出土炭化物

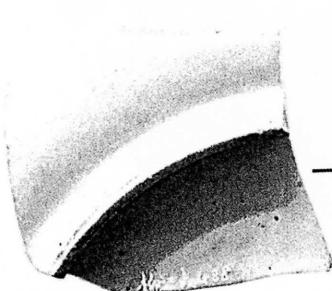
図版6



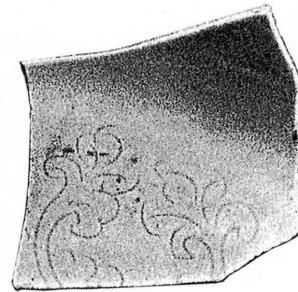
1



1



—



2

1区土坑1出土遺物



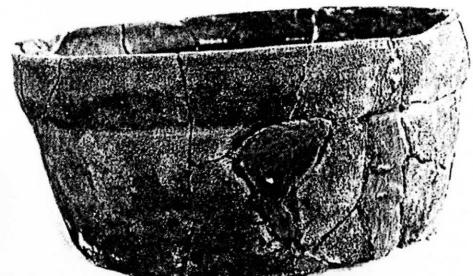
—



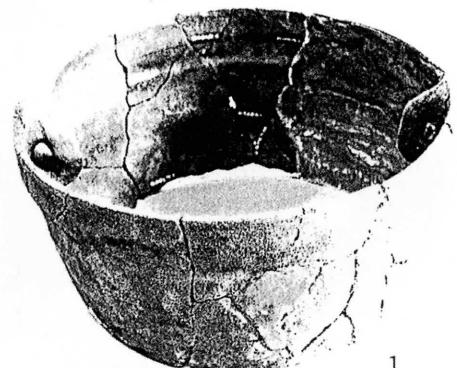
—



1



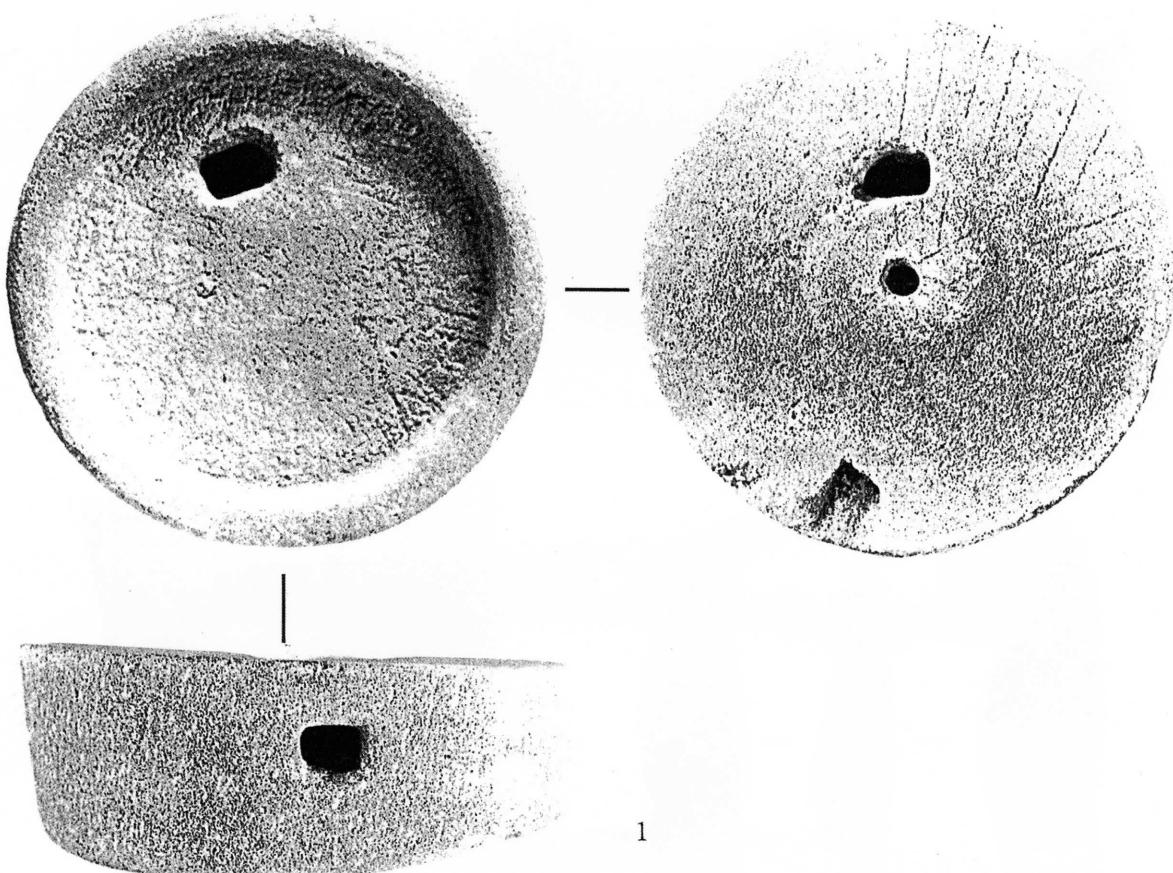
1



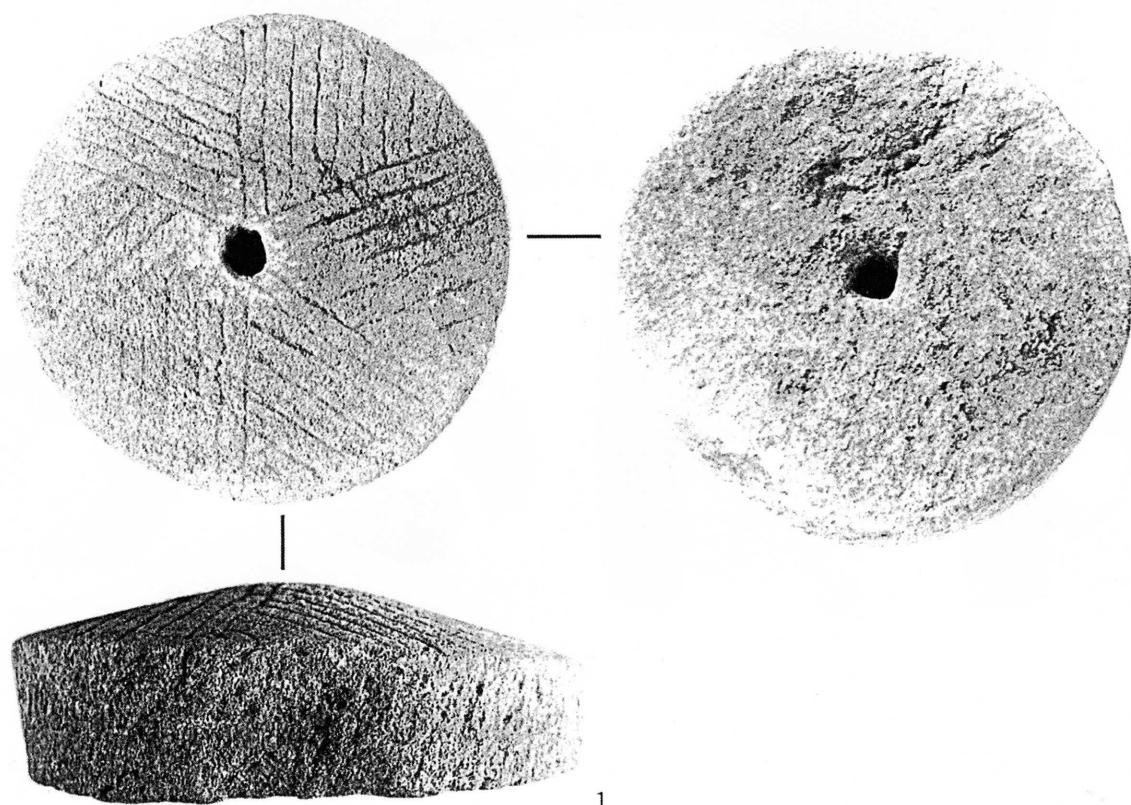
1

1区堀切1出土遺物

1区R-4グリット出土遺物



1 区堀切 2 出土遺物



1 区礎石 2 出土遺物

図版8

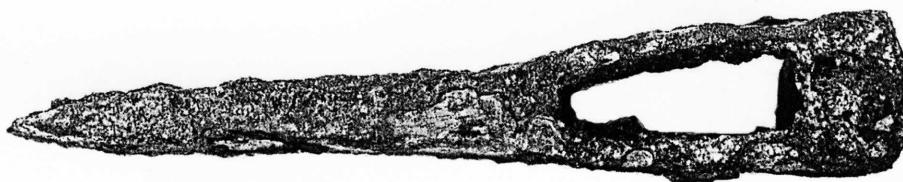


1区確認出土遺物(1)



1

2区落し穴2出土遺物

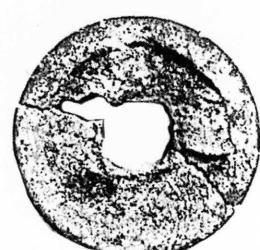
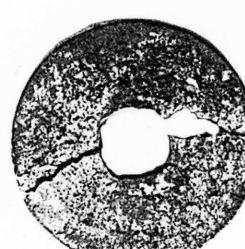


1

2区土坑3出土遺物



1



2

(熙寧元寶)

2区古銭出土

# 図版10



調査区航空写真



1区航空写真



2区航空写真

## 図版12



一郭部現況（西より）



一郭部調査（手前集石1、斜前礎石1）



一郭部現況礎石3方向を望む（東より）



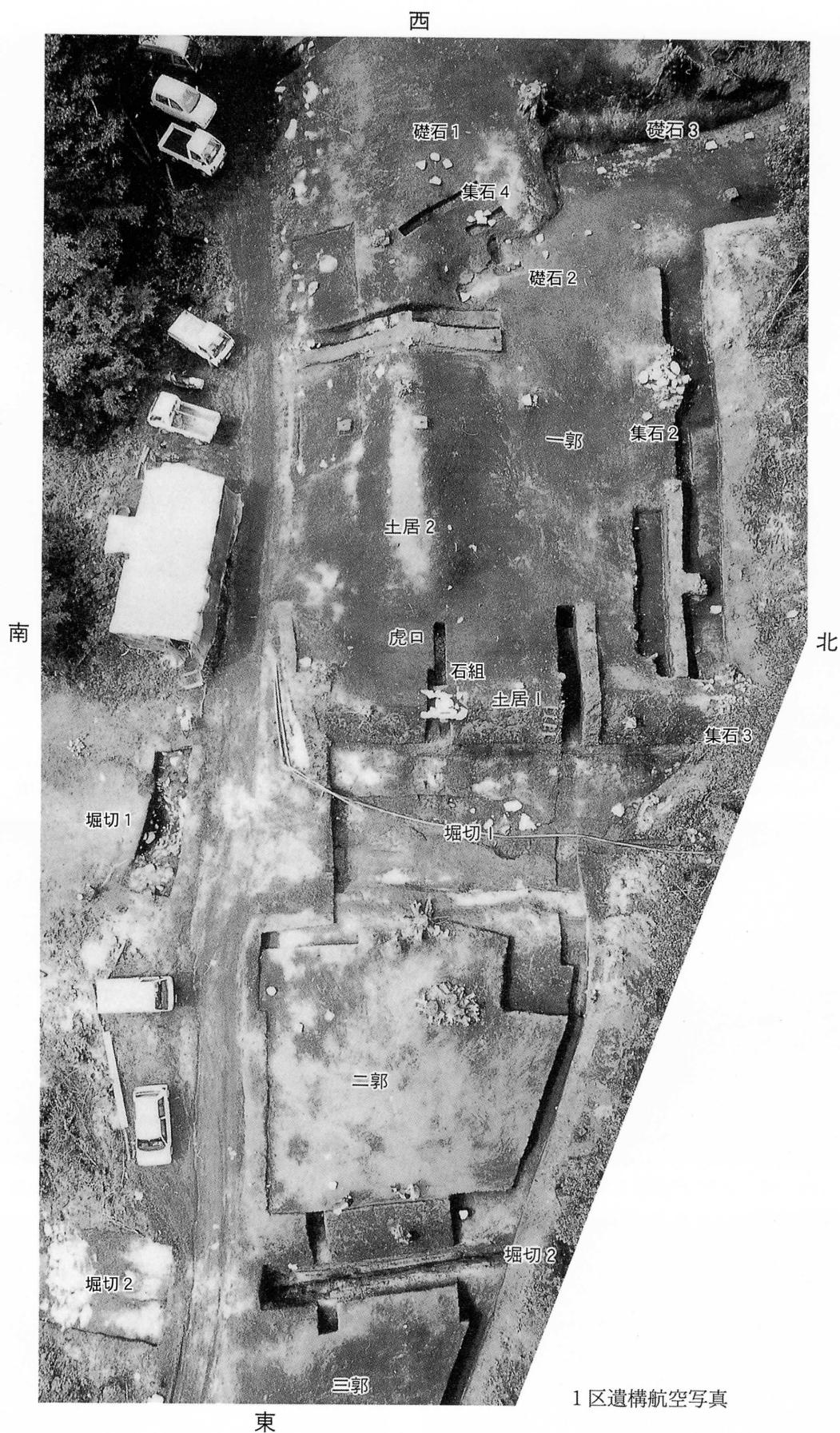
一郭部調査（手前集石2、奥礎石3）



堀切1現況（北より）

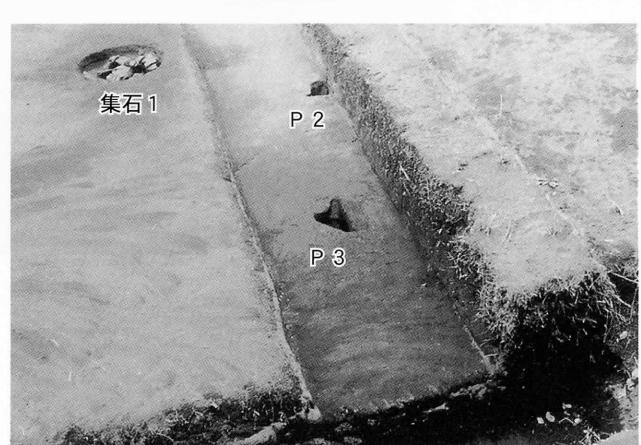
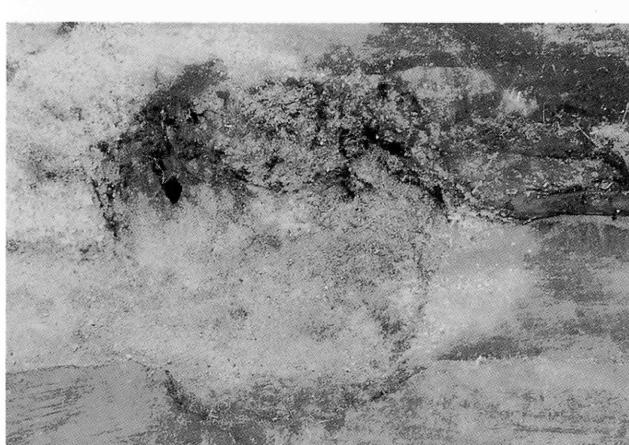
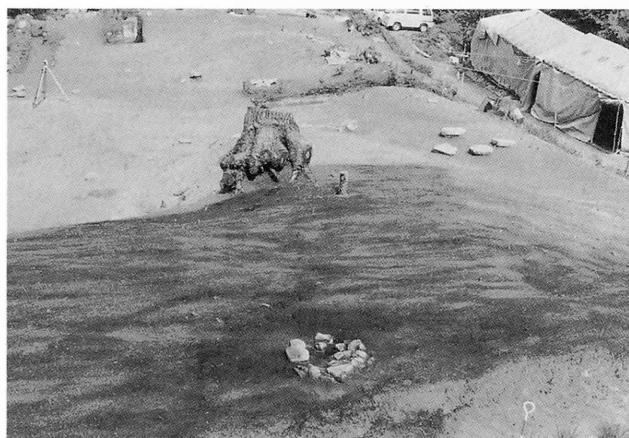


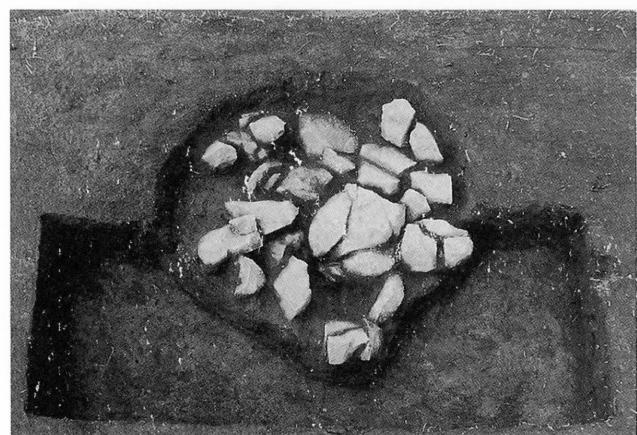
堀切1調査



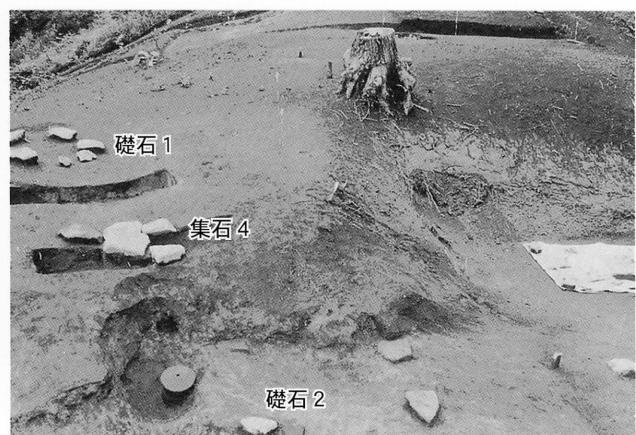
1区遺構航空写真

## 図版14





集石 1



上から礎石 1、集石 4、礎石 2（北東より）



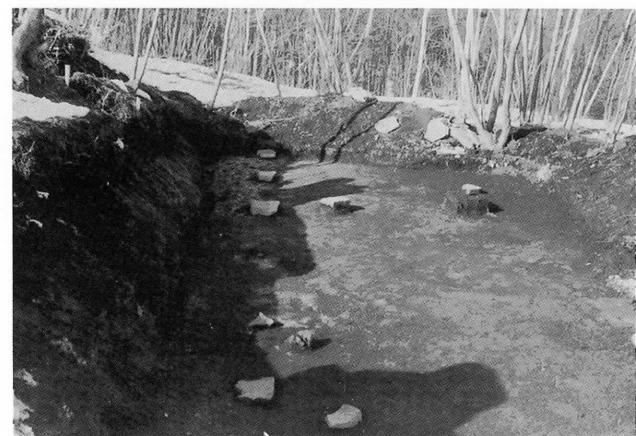
礎石 3 遺物出土状況（北より）



礎石 3 遺物出土状況（南より）



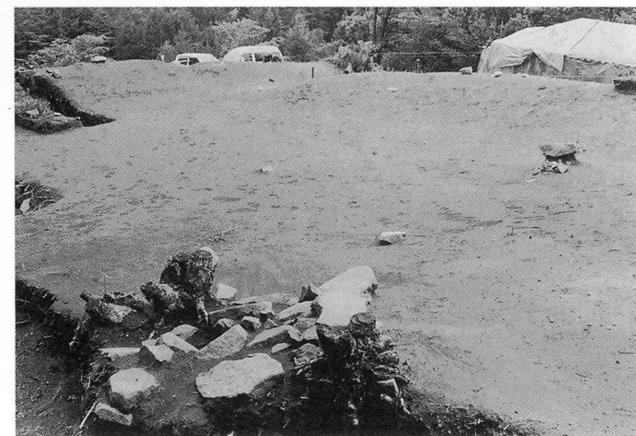
礎石 3（南東より）



礎石 3（石の並ぶ状況）



集石 2（礎石 3 を望む東より）

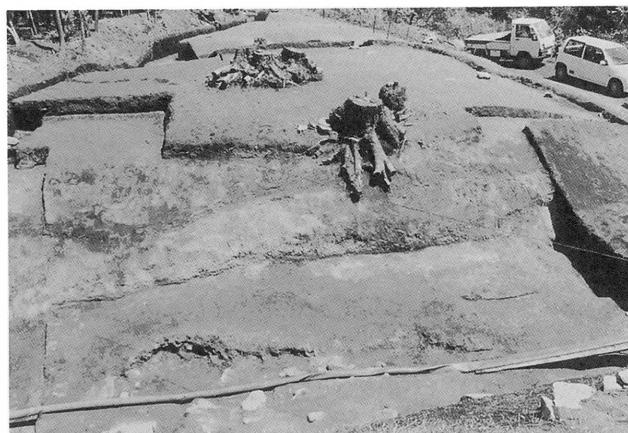


集石 2（前方に虎口を望む）

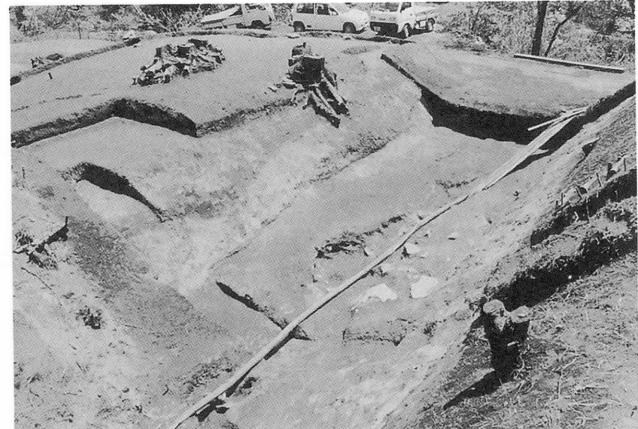
# 図版16



1区堀切1遺構写真



西より堀切1を望む（上は二郭）



北西より堀切1を望む



北東より堀切1を望む



堀切1の土層断層



南へ落込む堀切1



南東より望む堀切1



石組遺構現況（東より）



石組遺構現況（左は堀切1、北より）



石組遺構精査状況（石の蓋がしてある）



南より



石組遺構（石の蓋を取った状況）



南より

## 図版18



精査後石蓋をした所（東より）



石組みの状況（北東より）



土層断面（南より）



石組遺構土層断面（南西より）



集石3（堀切1を望む、北西より）



1区堀切2遺構写真



堀切2(南より)



堀切2土層断面

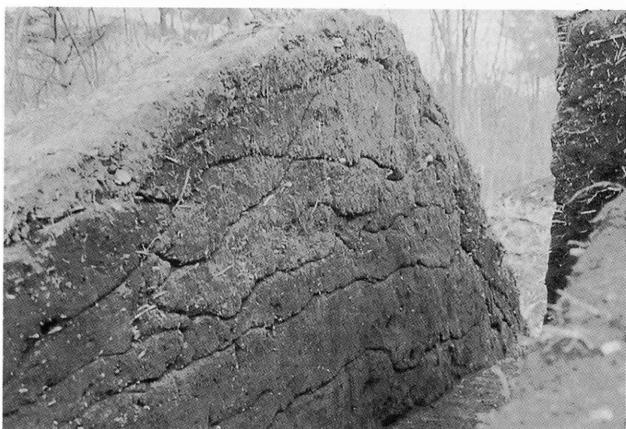
# 図版20



堀切 2 石臼出土状況 (北より)



南へ落込む堀切 2



土居 1(北) 土層断面



土居 1(北) 土層断面



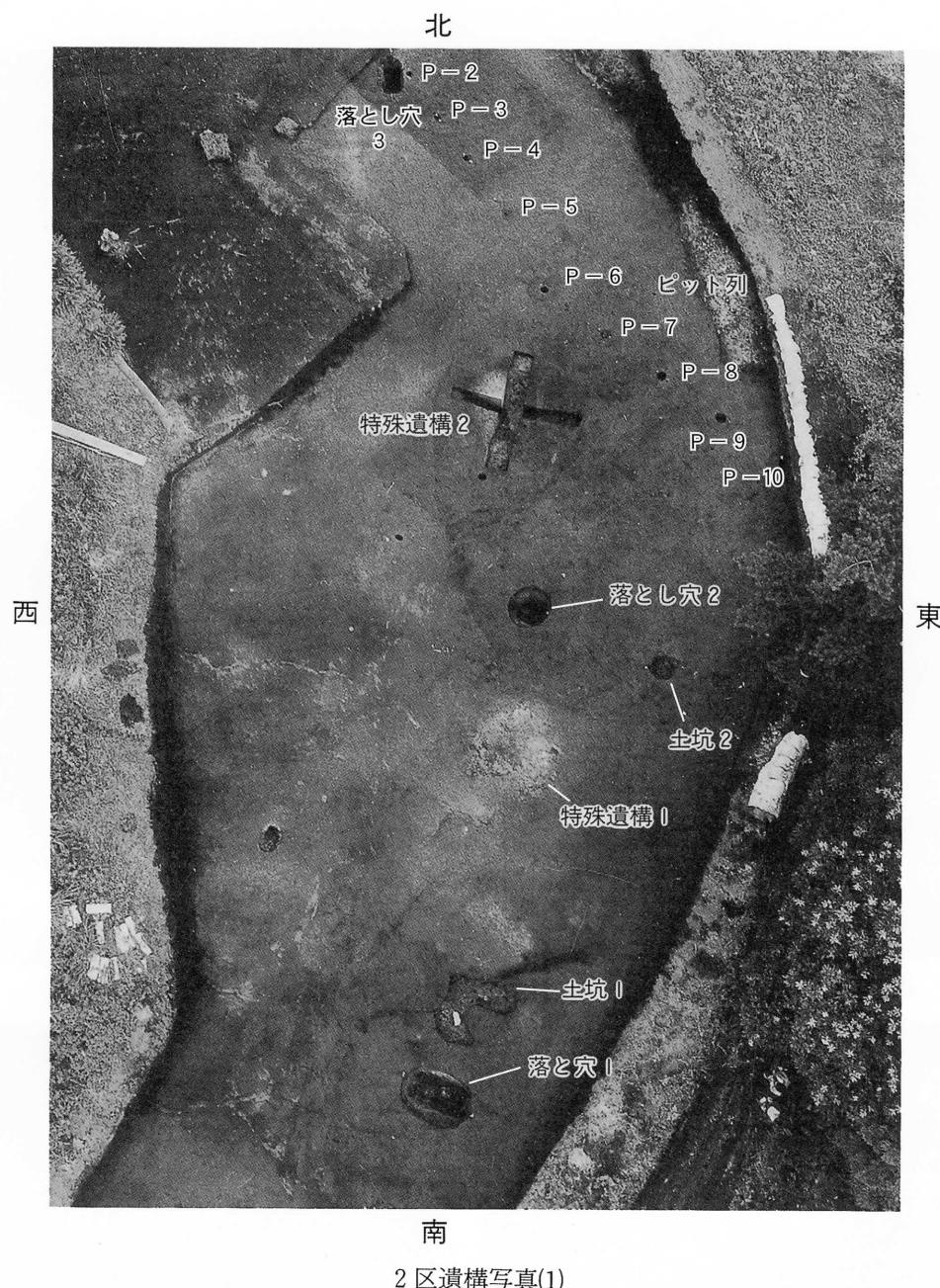
土居 1(南) 土層断面



土居 2 土層断面 (南より)



土居 2 土層断面 (西より)



## 図版22



落し穴 1



落し穴 2



落し穴 2 遺物出土状況



ピット 1 (P-1)



土坑 1



土坑 2



特殊遺構 1 土層断面 (南より)



特殊遺構 2 土層断面 (南より)



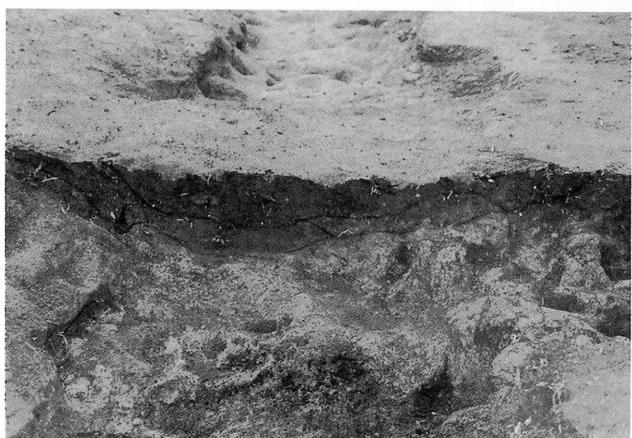
2区遺構写真(2)



2号溝（東より）



1号溝（北東より）



2号溝土層断面（第28図A地点）



1号溝土層断面（第28図D地点）

図版24



落し穴 3 (南より)



土坑 3 (東より)



古銭 1 出土状況 (熙寧元寶)



古銭 2 出土状況

**長野原町埋蔵文化財報告書第4集**

**柳沢城跡**

**発行** 平成7年3月31日

**編集** 長野原町教育委員会  
社会教育課

**発行者** 長野原町教育委員会  
〒377-13 群馬県吾妻郡長野原町  
大字与喜屋174  
TEL 0279-82-4517

**印刷所** 朝日印刷工業株式会社





